

南宋鄭定刊『重校添註音辯唐柳先生文集』考（上）

戸崎哲彦

はじめに

『柳集』の南宋刊本ではほぼ完全な形で現存する貴重な一本に、故新海一博士（1931-2001）が「南宋刊本中の善本の最右翼」¹と推称された鄭定刊『重校添註音辯唐柳先生文集』がある。以下、鄭本と略称する。早くは南宋・陳振孫『直齋書錄解題』²（以下、『直齋』と略称）巻16が著録する『柳集』三種の中に鄭本があり、その特徴を次のように記している。

『重校添註柳文』四十五卷、『外集』二卷：姑蘇鄭定刊於嘉興，以諸家所注輯為一編，曰“集注”，曰“補註”，曰章，曰孫，曰韓，曰張，曰董氏，而皆不著其名。其曰“重校”，曰“添註”，則其所附益也。

『直齋』が挙げる他の二本は「『柳柳州集』四十五卷、『外集』二卷」と「『柳先生集』四十五卷、『外集』二卷、『別録』一〔二〕卷、『摭異』一卷、『音釋』一卷、『附録』二卷、『事跡本末』一卷」。前者『柳柳州集』は穆修本と考える者も当時あったというが³、穆修四五卷本を祖本とする沈晦（1084-1149）が拾遺した『外集』2巻を備えている以上、沈晦編刊本（政和四年1114）以後の南宋初期刊本あるいはその系統本と見做さなければならない。後者『柳先生集』は南安軍葛嶠が『別録』を加えて前任方崧卿の『韓集』（淳熙一六年1189）と彙刊した南安軍刊本であり⁴、『音釋』一卷を別に附す。二本とも白文無註本であり、鄭本のみが輯註本であった。では、いかなる「以諸家所注輯為一編」かといえ、
「皆不著其名」の「孫」は孫汝聽、「韓」は韓醇、「張」は張敦頤を指すが、「章」と「董」は恐らく誤り。早く清・黃丕烈（1763-1825）が「董」を「童」の誤字、

¹ 新海一『柳文研究序説』（汲古書店1987年）「鄭定輯註本『重校添註音辯唐柳先生文集』札記」（p267）。

² 徐小蛮・顧美華点校『直齋書錄解題』（上海古籍出版社1987年、p477）。

³ 『直齋』に「或云沈元用所傳穆伯長本」。

⁴ 『直齋』に「方崧卿既刻『韓集』於南安軍，其後江陰葛嶠為守，復刊『柳集』以配之。別録而下，皆嶠所裒集也。『別録』者，『龍城録』及『法言注』五則。『龍城』，近人偽作。魏本には『龍城録』を収める。

つまり童宗説の註とする⁵。「章」は鄭本に見えない。これら南宋の諸家注および「集注」「補註」を彙輯したものであるというが、通覧したところ、多くが所謂の百家註本=紹熙年間(1189-1194)前後蜀中眉山地区刊『新刊増廣百家詳補註唐柳先生文』⁶(以下、眉本と呼ぶ)やそれを踏襲する五百家註本=慶元六年(1200)閩中建陽魏仲拳刊『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』(以下、魏本と呼ぶ)に見える。これらと鄭本は如何なる関係にあるのか。鄭本の功労はその書名から窺うに、これら旧来の「音辯」に「重校」「添注」を加えた点にある。では、「重校」「添注」とは具体的に如何なるものか。

次に、問題になるのが鄭本の版本である。眉本・魏本をはじめ、現存する南宋刊諸本と比較して、現存鄭本の初刊本と推測されるものにはすでに誤字・墨釘・白釘・空格や空白葉が多い。『直齋』には言及されていない。また足本が二部現存するが、いずれも補写・補刻が夥しく、しかも鄭本に拠った修補ではない疑いがある。したがってテキストとしては非常に扱いにくく、使用するには細心の注意が必要である⁷。清初に翰林院編修であった何焯(1661-1722)がこれを用いて「粗校」(康熙四五年1706)しているが⁸、それ以後今日まで敬遠されて来た一因はここにあるかも知れない。定本として定評のあった呉文治等点校『柳宗元集』(中華書局1979年)や呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』(黄山書社2004年)⁹、また最近の『柳宗元集校注』(中華書局2013年)全10冊に至っ

⁵ 黄丕烈『蕘圃藏書題識』卷7「五百家注音辨唐柳先生文集十一卷：殘宋本」(『黄丕烈藏書題跋集』上海古籍出版社2013年、p390)に「此本“董”作“董”」と指摘。本書は南京図書館蔵、中華再造善本(国家圖書館出版社影印、2003年)の一つ。題跋もその扉に影印。たしかに「董曰」が見えるが、註文は魏本等に見える「董曰」と同一。

⁶ 拙稿「簡州石刻柳宗元「永州八記」再考——その底本と宋代蜀本「柳集」の系統」(『島大言語文化』29、2010年)。

⁷ 呉文治等『柳宗元集』(中華書局1979年)、呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』(黄山書社2004年)、尹占華等『柳宗元集校注』(中華書局2013年)では鄭本を校本の一つとして挙げているが、たとえば巻30「寄許京兆孟容書」の「有豈有賞哉」下の註で呉「校勘記」に「世綵堂本注：「一無『豈有賞哉』四字。」鄭定本無此四字，疑是」(p785)というのは全くの出鱈目。鄭本に「豈有賞哉」四字あり、その下に註して「重校：韓(韓本)無『豈有賞哉』四字」、世綵堂本の注はこれを引用したもの。さらに滑稽であるのは尹「校記」に「世綵堂本注：「一無『豈有賞哉』四字。」鄭定本無此四字」(p1959)。「疑是」さえ削った。迷惑な剽窃である。なお、丁延峰『海源閣藏書研究』(商務印書館2012年)に「由呉文治等人點校的中華書局1979年版『柳宗元集』，其底本為宋嘉定鄭氏本『添註重校音辨唐柳先生文集』」(p410)とするのは重大な誤り。底本は百家註本=眉本である。

⁸ 何焯『義門讀書記』卷37「河東集下」末(中華書局1987年、p676)。

⁹ 呉文治等『柳宗元集』は鄭本について「殘本」(p1503)「南宋原刻殘本」(p1507)というのみであるが、呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』には「現僅剩殘本五卷(卷十八至

でも鄭本を校本として用いたというが¹⁰、どうも疑わしい、あるいは多くの遺漏がある¹¹。とはいえ「重校」「添注」はこの書の最大の特長にして今日見られない南宋『柳集』諸本の存在と異文および註を伝える点において極めて貴重である。しかるにこのような認識に立った本格的な学術研究と呼べるものは少なく、あるいは包括的ではなく¹²、さらにいえば鄭本の現存状況さえ掌握されていない。今後、『柳集』の『校注』『異文彙録』『彙註』の類は、この鄭本や劉怡輯註（淳祐九年1249劉欽序）『増廣註釋音辯唐柳先生集』四五巻の南宋麻沙坊刻本（以下、劉本と呼ぶ）、天祿琳琅所蔵の韓醇詰訓（淳熙四年1179韓醇記）『新刊詰訓唐柳先生文集』南宋刊本に拠る清鈔本にして校勘を附す四庫全書薈要本『柳河東集』（以下、韓本と呼ぶ）¹³、さらに近年存在が明らかになった南宋刊永州本（以下、永本）の残巻などにも拠って¹⁴、あらためて試みる必要があるのではないか。本稿ではまず現存本の所在と状況およびその素性を明らかにした上で¹⁵、新海先生の驥尾に附して鄭本の特徴とその価値について再考して些か蛇

二十、卷四十三至四十四）、蔵北京國家圖書館」（p13）という。新海博士が「臺灣の國立中央圖書館蔵、鄭定輯註本全二十四冊のマイクロ・フィルムが柳宗元集校點組にあるのではないか」（『鄭定輯註本『重校添注音辯唐柳先生文集』札記』p274）と詮索されたように不可解な部分が少なくない。

¹⁰ 『柳宗元集校注』の「整理説明」に「鄭定的『重校添注音辯唐柳先生文集』亦為殘本、現存十七卷」（p3）とするが、所蔵先等具体的なことが明示されていないため、指す所を知らない。ちなみに台湾・中央圖書館蔵#09758は「現存十七卷」であるが、同館には宋刊45巻が現存する。現存本については後文で詳述。

¹¹ 拙文書評「九層の台も累土より起こる—『柳宗元集』の定本登場か」（『東方』402、2014年）。

¹² 管見によれば、岳珍「宋刊『重校添注音辯唐柳先生文集』考述」（『湖南科技學院學報』2010-1）、鄧小紅・張正霞「『重校添注音辯唐柳先生文集』研究」（『重慶三峽學院學報』2012-6）がある。岳氏論文は海源閣旧蔵本（拙稿のいうA本）のみに拠ったもので、拳例は多くが巻1。鄧氏論文は広東省博物館所蔵本殘三巻（巻20-22）に拠る論考で、刻工について詳しいが南宋の1126年から1233年の間に江蘇・浙江一帯で活躍したという平凡な結論で終わっており、『楹書隅録』の著録は固より、国内外の先行研究が全く参考にされていない。他に、論文とはいえないが、李艾玲「廣東省博物館蔵『重校添注音辯唐柳先生文集』簡析」（『文物鑒定與研究（二）』文物出版社2004年）の紹介がある。

¹³ 『天祿琳琅書目』巻3「宋版集部」（上海古籍出版社2007年、p66）。

¹⁴ 拙稿「南宋永州刊『唐柳先生文集』三三巻本初攷」（『島大言語文化』39号、2015年）。

¹⁵ 阿部隆一「増訂中國訪書志」（汲古書院1976年、p555下）に「元明盛行の麻沙本の譌脱を訂し得る所が頗る多い」と評される「麻沙本」とは『増廣註釋音辯唐柳先生集』四三巻本を指すと思われるが、「麻沙本」や「元明」刊本に限らない。なお、『増廣註釋音辯唐柳先生集』は宋刊四五巻本が北京大学圖書館に、同刊本の鎌倉期鈔本が蓬左文庫に蔵されている。拙稿「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」（『島大言語文化』33、2012）、「日本舊校鈔『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻本及南宋刻『音註唐柳先生集』略攷」（『文史』総106輯、2014-1）。

足を加えると共に、『校注』『彙註』を志す同仁の爲にも、鄭本「重校」の所拠本、現存本の補葉を整理して資料を提供しておきたい。

I 『重校添註音辯唐柳先生文集』の刊行

鄭本の刊行者と刊行地についてはすでに定説がある。ただ時期に関しては、陳振孫(1183-1261?)『直齋書録解題』(嘉熙二年1238に開始)に見えるからそれ以前の南宋刊本にして¹⁶、嘉定間とするのがすでに定説であるが、さらに限定することが可能である。

寧宗嘉定十四年(1221)嘉興軍知軍鄭定刊

すでに『直齋』に「姑蘇鄭定刊於嘉興」という。原刻本には序跋の類が附せられていてそれに拠ったのではなからうか。以下に紹介する現存本(AからI)いずれもその類の文あるいは刊記・牌木は見えない。時期については『直齋』に言及がなく、最も早く考察したものは鄭本の収蔵者であった楊紹和(1830-1875)であろう。清初に何焯が「其字畫乃乾、淳以前書」¹⁷、乾道(1165-1173)・淳熙(1174-1189)以前つまり孝宗朝(1162-1189)以前、恐らく高宗朝(1127-1162)の成書と推定したが、後に楊紹和の跋には「宋刊添註重校〔重校添注〕¹⁸音辨唐柳先生文集四十五卷、外集二卷、共二十四冊、四函」と題して次のように考証する¹⁹。

又予藏宋槧岳倦翁(珂)『愧郊錄』,亦剗闕於禾中(嘉興),其行式、字數及板心所記刻工,若曹冠宗、曹冠英、丁松、王顯諸姓名悉同,此本則為鄭定嘉興所刊,愈無疑義。「愧郊錄序」署“嘉定焉逢淹茂”,此本必同時受梓,蓋鄭定之知嘉興,正在寧宗朝也。

¹⁶ 尾崎康「宋代における刊刻の展開」(『帝京史学』19、2004年;もと『故宮學術季刊』20-4、2003年)にいう「李白・柳宗元らにも標題に「増広註釈」「重校添註」などの文字を冠した元版の類が珍しくない」(p105)は誤り。『重校添註音辯唐柳先生文集』を指しているように思われるが、「元版」が「重校添註」を冠するのではない。わが国ではすでに長澤規矩也が零本を入手しており、「南宋末年浙刊本」(『長澤規矩也著作集』巻3、汲古書院1983年、p187)とする。

¹⁷ 何焯『義門讀書記』巻37「河東集」末(中華書局1987年、p676)。

¹⁸ 『楹書隅録』巻4(39A)。「總目」(8A)にも「宋本添註重校音辨柳先生文集四十五卷、外集二卷」に作るが、『周叔弢批註楹書隅録』巻4(国家図書館出版社2009年)は「添註重校」に乙を附して「重校添註」に改める。万曼『唐集斂録』(中華書局1980年、p196)が引用して「外集」を「三卷」に作るのは誤り。

¹⁹ 後に張鈞衡・繆荃孫『適園藏書志』巻10「増廣注釋音辨柳集四十五卷:宋刊本」(国家図書館出版社「清末民國古籍書目題跋七種」2009年、p349)にも同文を引く。

岳珂『愧郟録』との刻工名の共通から「愧郟録序」にいう「嘉定焉逢淹茂（甲戌七年）」と「同時受梓」であるとする。その後、昌彼得（1921-2011）はこの「同時受梓」説を精確ではないとして考証を加えるが、結局は嘉定「十多年間」としただけで²⁰、未だ特定するに至っていない。

1) 岳珂（1183-1234）『愧郟録』15巻（20.7×15.8、左右双辺、白口、9行17字）の他に2) 岳珂『程史』15巻（20.8×15.7、左右双辺、白口、9行17字）の自序にも「嘉定焉逢淹茂歲圉如既望」とあり²¹、両書の宋原刻本は版式・刻工が合致するのみならず、『重校添註音辯唐柳先生文集』（20.5×15.4、左右双辺、白口、9行17字）とも合致し、刻工はさらに3) 嘉定一三年一月建康府溧陽県知県陸子適序刊の『渭南文集』50巻（15.9×13、左右双辺、10行17字、白口）とも共通する²²。ちなみに以上四書の刻工（一部）は以下の通り。

書\刻工姓名	劉昭	丁松	宋芾	宋秦	沈昌	朱春	王顯	吳椿	董澄	金滋	馬祖	李涓	石昌	曹冠宗	王遇	馬良	陳彬	徐珙	吳彬	李仁
程史	○	○	○	○	○	○														
愧郟録	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○
渭南文集	○	○	○	○					○	○	○	○				○	○	○		
重校添註柳集	○	○				○	○	○	○	○			○	○	○	○				

およそ刊刻と刻工には地理的關係がある。建康府溧陽県は南宋の首都であった杭州臨安府の西北に、嘉興軍府は東北に隣接する。これらの書はおそらく臨安府の書坊に委託しての刊刻であり²³、葉德輝（1864-1927）の分類では鄭本を「宋私宅家塾刻書」²⁴に入れるが、嘉興知軍鄭定による嘉興軍出資の官刻本と考

²⁰ 昌彼得『〔増訂〕蟬庵群書題識』（台湾・商務印書館1997年）「跋宋刊本『重校添註音辯唐柳先生文集』」に「鄭定之任職、當亦在十多年間、距岳氏之刻『愧郟録』亦僅數載、故刻工仍多相同。楊氏謂二書同時受梓、恐未確也」（p261）。

²¹ 『中華再造善本總目提要・唐宋編』（中国・国家図書館出版社2013年、p421）。

²² 『中華再造善本總目提要・唐宋編』（p695）。すでに『増訂中國訪書志』（p555上）は楊紹和の説を受けて『尚書正義』等20余書に見える同刻工名を挙げて「嘉定中嘉興に於ける刻たること疑いが無い」と結論する。『渭南文集』は挙げられていないが、年代が明示されているものに嘉定一二年（1219）『資治通鑑綱目』（石昌）、淳祐二年（1242）『心經政經』（馬良）、寶祐五年（1257）『資治通鑑紀事本末』（馬良）がある。

²³ 『増訂中國訪書志』（p555下）に「杭州圏内」とするが、地域が明示されているものには、杭州刊や越刊・浙刊の他に湖州刊『資治通鑑紀事本末』（馬良）、池州刊『晦庵先生朱文公語録』（吳椿、劉昭）、温州刊『心經政經』（石昌）、さらに江西省南部の贛州刊『文選』（王禧、吳椿、高文、高寅、陳良、董澄、繆恭、劉昭、龐知德）、大庾県刊『心經政經』（馬良）など、両浙東西路から江南東西路に至る、かなり広域に及ぶ。

²⁴ 『書林清話』巻3（岳麓書社1999年）「姑蘇鄭定。刻『重校添註柳文』四十五卷、『外集』二

えるべきである。また、刻工は嘉定七年の『程史』よりも嘉定一三年冬の『渭南文集』の方により多く共通する。

岳珂は嘉定七年に嘉興軍を離任²⁵、十三年(1220)に知軍の鄭定は「興學を先務と為し」²⁶、軍学は十四年中に完成した²⁷。『柳集』の輯註刊行は興学事業の一環であったに違いない。十三年十二月には朱在が就任している²⁸。鄭定の任期中に企画され、『直齋』に「姑蘇鄭定刊於嘉興」というから、離任前に完成しているはずであり、嘉定十四年中の刊行と考えてよからう。なお缺筆について、従来の説の多くが孝宗(昏、1162-1189)までとするが²⁹、明らかに次の光宗(惇、1189-1194)に及んでおり³⁰、次の寧宗(擴、1194-1224)には及ばない³¹。嘉定

卷」(p70)。

²⁵ 『〔至元〕嘉禾志』(『宋元方志叢刊5』、中華書局1990年)の郭晦「序」(至元二五年(1288))に「郡守岳珂嘗命先輩關表卿重修。……未成而倦翁(岳珂)改調」(p4413)、唐天麟「序」(至元著雍困敦戊子二五年)に「嘉定甲戌(七年)、郡守岳珂俾悼前聞之遺闕、嘗命鄉先輩關表卿任行人子羽之事、編稿將上、而岳侯去」(p4414)。袁國梓纂修『〔康熙〕嘉興府志』(『稀見中國地方志彙刊15』、中國書店1992年)には誤りが多い。卷6「學校・嘉興府」に「嘉定十一(?)年知軍府岳珂改建、未就。十三年知軍府鄭定成之」(p239)、卷14「郡職・軍守」の「宋・嘉定」下に「岳珂。呂正己。史宅之。倪祖常。朱煥。潘師旦。趙定：『舊志』作鄭定。劉漢弼」(p427)。

²⁶ 『〔至元〕嘉禾志』(『宋元方志叢刊5』)卷7「學校」(1A)に「嘉定十三年、守臣鄭定復以興學為先務」(p4459)。また同書卷17「碑碣」の樓樞「題『海頭謠』」に「是樞李海邑(嘉興府海塩県)人士為太守鄭公作也」(p4544)、于有成「題『海頭謠』」(嘉定十四年三月)に「嘉興鄭侯、人言其政則吏治可稱、人言其教則化術有方：惜官賦而謹用度、守條格而肅姦欺、民訟以理、邦計以足、是謂吏治者類此；崇修學校、以樂後遊、廣建試闈、以來貢士、不徇時趨、一切之令而咸安民居、不黨貧孤、百姓之望而代輸民稅、是謂化術者類此。余方嘉其所學之不悖、是宜「海頭謠」之所由作也」(p4544)と讃えられた「嘉興」「太守」「鄭侯」は鄭定であろう。

²⁷ 『〔至元〕嘉禾志』卷16「碑碣」の高熙績「府學新創小學記」(嘉定十七年)に「嘉定庚辰(十三年)、鄉同年吳君杜、分教初筵、亟請于郡、廣學宮而新之。明年學成。……前駕部鄭侯始之、今戶部朱侯煥在樂繼焉」(p4529)。

²⁸ 『〔紹定〕吳郡志』(『宋元方志叢刊1』)卷7「提舉常平茶鹽司(題名)」(19B)に「承議郎朱在：嘉定十三年……十四年除右曹郎官。十二月、時暫兼權嘉興府」。朱在(1169-1239)は朱熹の季子。『〔至元〕嘉禾志』所収の高熙績「府學新創小學記」は「朱侯煥在樂繼焉」に作り、『〔康熙〕嘉興府志』は「朱煥」とする。李默『建寧人物傳』(嘉靖十七年刻)に「(朱)在、子叔敏、用蔭補官。嘉定初……十年以大理正知南康軍、奉祠、起家、知信州、……除提舉浙西常平茶鹽公事、加右曹郎官、兼知嘉興府」(『閩刻珍本叢刊21』鷺江出版社2009年、p147)。

²⁹ 阿部隆一「増訂中國訪書志」は「朗……桓構慎の字の末筆を欠く」(p553下)、『國家圖書館善本書志初稿』は「朗……桓構慎等」(p133右)、昌彼得『〔増訂〕蟬庵群書題識』に「玄、朗……桓、慎等字缺筆、亦或不缺、而於弘、殷、構等字、未見缺筆者」(p259)、岳珍「宋刊『重校添註音辯唐柳先生文集』考述」(『湖南科技學院學報』2010-1)に「……“構”、“慎”等字闕筆」(p26右)。

³⁰ 「惇」と同音の「敦」(3-24A、7-6B等)を缺筆。

³¹ 「擴」と同音の「廓」(1-16A、2-02B、2-17B、5-4B、7-03A、11-02B、12-01B、14-12B、

年間は寧宗朝の後期に当たる。寧宗慶元六年（1200）の刊記をもつ魏本も、宋刊残卷（巻16-21、巻37-41）によれば缺筆は光宗諱で終わり、寧宗諱に及ばない。これは鄭本の底本と関係があるのではなかろうか。後述するように鄭本は魏本を底本としていると考えられるが、魏本の原稿は光宗朝に完成していたのではないか。

「嘉禾註本」

鄭本はまた「嘉禾註本」とも呼ばれた。早くは張秀民『中國印刷史』³²に

鄭定於嘉興刊『重校添注柳文』四十五卷、外集二卷、或稱嘉禾注本。

というのがそれであるが、これは世綵堂廖瑩中（?-1275）刊『河東先生集』（以下、廖本と呼ぶ）「河東集凡例」中にある次の一文

嘉禾註本引黃唐『柳文雌黃』於篇章之後。其辭每多詆訾，殊非崇尚此集之意，今刪去。

というのに拠るであろう。当時、「嘉禾」なる地は二箇所あった。一つは嘉興府秀州。北宋政和七年（1117）に秀州を嘉禾郡に改名。先の楊紹和の跋に「割嗣於禾中」という地である。慶元元年（1195）に嘉興府に陞り、嘉定元年（1208）に嘉興軍の額を賜い、元の至元十三年に嘉興府に復す³³。一つは建寧府建陽県。南宋景定元年（1260）に建陽は嘉禾に改名、元に至って旧名に復す。廖本は景定初より後の刊刻であるから、「嘉禾」とはこの二箇所のいずれかを指すが、以下の理由によって嘉興府と考えられる。

1) 引用された「黃唐」とは福州長樂の人、淳熙四年（1177）上舎にて釈褐³⁴。紹興間に浙東茶塩司にて『五經正義』等經史書を校刊、慶元三年（1197）に出でて江淮都提點坑冶となる³⁵。百家註本＝眉本に附す「新刊百家音辯詰訓柳文諸儒名氏」に

上舎黃氏：名唐，著『柳文雌黃』五十篇。

と見え、眉本の系統にある魏本・鄭本には「黃狀元唐」「黃曰」として引用する。計40余条。眉本は蜀中刊本に属し、魏本や劉本は建陽刻本であるからこれら

19-02B、20-02A 補葉、25-10B、27-01B、27-09B 補葉、28-05B、29-13A、36-05B、38-03A、38-13A、40-19B、41-02A、41-又09B、44-18B等）は全く缺筆せず。

³² 張秀民『（插圖珍藏増訂本）中國印刷史（上）』（浙江古籍出版社2006年、p88）。

³³ 『〔至元〕嘉禾志』巻1「沿革」（p4417）。

³⁴ 『〔淳熙〕三山志』（『宋元方志叢刊8』）巻30「人物類・科名」（12A）。

³⁵ 黃唐「刻禮記正義後」、「江淮都提點坑冶司拘催違欠解錢事奏」。『全宋文（282）』巻6408「黃唐」（p339）。

も「嘉禾註本」と称してよいが、劉本は黄註を引かない。

2) 廖本「凡例」の前文に次のようにある。

惟建安所刊五百家註本二集始具，然所引蔡夢弼、任淵、孫汝聽、劉崧、韓醇、童宗說、張敦頤、陳鶚諸家註文，間多龐雜，而胥山沈晦辯、雲間潘緯音義却未附見，非闕與。

「建安」「五百家註本」つまり魏本を挙げているが、この「建安」は建寧府の建安県ではなく、古称旧名を用いているのであって実際の地としては建陽県を指す。したがって魏本も「嘉禾註本」と称してよいが、すでに「五百家註本」と称しており、後文で突如「嘉禾註本」と換言するのは一般的ではない。

以上の理由によって「嘉禾註本」が鄭本を指していること、また廖本が鄭本を用いていたことが知られる。さらにいえば、廖本は鄭本をただ一校本として参照したのではなく、底本として利用している³⁶。

II 『重校添註音辯唐柳先生文集』の現存本

鄭本は意外と多く現存する。いずれも南宋刊本であるが、足本は二部に過ぎず、しかも多くの補配を経て成っており、注意すべき点が多い。

A 台湾・中央図書館蔵#09756：宋刊、四五巻、外集二巻、24冊4函³⁷

以下、本稿ではA本と略称する。現存本には多くの蔵書印やいくつかの著録があるが、その中で最も早いものは印「常郡楊伯鎮家藏」ではなかろうか。この捺印が最も多く（巻06、13、17、24、33、39、43）、しかも最も良い位置（01A首行下方）を占めている。仮に「楊伯鎮」が明人であるとしても少なくとも二人いる。一人は宋の理学者として著名な龜山先生楊時（1053-1135）の九世孫、楊伯鎮（号は立雪齋）であるが、楊時と同じ「延平」（福建省南平市）の人であり³⁸、一人は常州武進の人で字を伯鎮という楊圻（1364-1470、号は守庵）である

³⁶ 鄭本と廖本の関係は呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』（黄山書社2004年）の「世綵堂本」直接採用「鄭定本」（p13）の説く所であるが、すでに傅增湘『藏園羣書題記』巻3「校宋刊大字本重校添註音辯唐柳先生文集跋」（上海古籍出版社1986年、p612）が兩本を対勘して「瑩中所刻正出此本，特刪去「重校」「添註」等字耳」（p612）と鑑定している。また、新海一「鄭定輯註本『重校添註音辯唐柳先生文集』札記」は具体的な例を示して「世綵堂本にほとんど忠実に残されている」（p268）が、「世綵堂本では削除されている」（p279）ことを指摘している。

³⁷ 『國家圖書館善本書志初稿』（p134）、阿部隆一『增訂中國訪書志』（p553下）。

³⁸ 明・徐一夔（?-1400）『始豐稿』巻7「立雪一齋記」（徐永恩『始豐稿校注』浙江古籍出版社2008年、p188）。

が、「武畧將軍鎮江衛千戸」武官である³⁹。あるいは他の人物かも知れない。断定できるのは「秀水朱氏潛采堂圖書」、朱彝尊(1629-1709)⁴⁰である。一説に「徐氏傳是樓舊物」つまり明末清初の徐乾学(1632-1694)旧蔵本とするが⁴¹、これは『楹書隅録』の記載を誤って解釈したものである⁴²。朱彝尊の蔵書は孫の代、朱稻孫(1682-1760)の晩年に至って家境貧寒に陥り、乾隆中から蔵書を売却するようになるが⁴³、本書もその中にあったのであろう。清代後期までの経緯は不明。「東郡楊紹和字彦合蔵書之印」「東郡楊氏鑑藏金石書畫印」「彦合珍玩」「楊紹和讀過」「紹和筑巖」⁴⁴「道光秀才咸豐舉人同治進士」「楊氏協卿平生眞賞」「協卿讀過」「東郡宋存書室珍藏」「宋存書室」「聊攝楊氏宋存書室珍藏」「瀛海僊班」等の印は嘉興の楊紹和(1830-1875)のものであり、自記によれば「同治丙寅(五年1866)に都門(北京)で購った⁴⁵。「海源殘閣」「楊保彝藏本」と「聊城楊承訓鑒藏書畫印」「楊承訓印」があるから、子の楊保彝(1852-1910)から孫の楊承訓(1900-1970)まで、楊氏三代に亘って収蔵されたが、民国一六年(1927)に楊承訓は蔵書を天津で売りに出した⁴⁶。本書はその時の「二十六種」の一つで⁴⁷、購入したのは北平(北京)にあった書店⁴⁸、文祿堂王文進(1894-1960)であ

³⁹ 毛憲(成化十七年(1481)進士)『古菴毛先生文集』(嘉靖四一年(1521)刻)(四庫全書存目叢書・集部67)に「武畧將軍鎮江衛千戸守菴楊君行狀」。

⁴⁰ 朱彝尊『曝書亭蔵書目』(『清代私家蔵書目録題跋叢刊』第1冊、国家図書館出版社2010年、p216)に『柳集』は「柳河東集：二十本」の一部が見えるのみ。『曝書亭序跋・潛采堂宋元人集目録・竹垞行笈書目』(上海古籍出版社2010年)には見えない。

⁴¹ 万曼『唐集叙録』(中華書局1980年)に「『楹書隅録』……書通體完整、僅有鈔葉數十番、係徐氏傳是樓舊物、有秀水朱氏潛采堂圖書、朱彝尊所蔵葉」(p196)。

⁴² 『楹書隅録』卷4(39B-40A)に「此書通體完整、有鈔葉數十番、彌足珍。已往于江南獲〔五〕百家註本、乃傳是樓故物。此本卷首有秀水朱氏潛采堂圖書、則竹垞(朱彝尊の号)舊藏也。また「五」を脱字。『楹書隅録』卷4(38A)「宋本五百家註音辨書柳先生文集」に「有黃氏太沖梨洲、乾學徐健菴東海傳是樓、……各印」。また徐乾学『傳是樓書目』4卷に「柳柳州集四十三卷：別集、外集、附録五卷：六本。柳文注釋音義四十八卷：十四本。又一部二十卷、別集一卷、外集一卷：宋潘緯譯釋、陸之淵序。十四本」の三部を著録するが、前一部は恐らく五百家註本=魏本、後二部は劉本系統。林夕主編『中國著名蔵書家書目匯刊・明清卷(18)』所収、商務印書館2005年(p450)。

⁴³ 昌彼得『〔増訂〕蟬庵群書題識』(p263)、鄭偉章『文獻家通考(上)』(中華書局1999年、p74)、『中國蔵書樓』(遼寧人民出版社2001年、p285、p1402)。

⁴⁴ 『國家圖書館善本書志初稿』は「筠嶠」(p134)とするが、「筑巖」の誤。

⁴⁵ 『楹書隅録』卷4に「同治丙寅購於都門」。

⁴⁶ 王紹曾等『訂補海源閣書目五種(上)』(齊魯書社2002年)「序」(p2)。

⁴⁷ 王紹曾等『訂補海源閣書目五種(上)』(p234)。

⁴⁸ 『文祿堂書影』(民国二六年1937)(北京図書館出版社2003年影印)には見えない。文祿堂は民国十四年に北京の東南園に開設、二二年に琉璃廠に移転する。王文進『文祿堂訪書記跋』(『文祿堂訪書記』(民国三一年)上海古籍出版社2007年、p402)に詳しい。

る⁴⁹。この間、天津で傅增湘(1872-1949)や周暹(1891-1984)が寓目しており、仔細に記録している。本書は「苙圃收藏」湖州の張乃熊(1890-1945)が購入し⁵⁰、民国二六年(1937)⁵¹に、あるいは張乃熊『苙圃善本書目』(民国三〇)に見えるからそのやや後に、中華民国国立中央図書館に帰した。民国二六年七月七日に盧溝橋事件、七七事変が勃発。当時、中央図書館は南京に開設されていたが、日本軍の空爆によって西遷し、日本降伏後の三五年(1946)に南京に回帰、三七年に精選された文物は台湾に輸送された。

一説に「張氏適園旧蔵」⁵²あるいは「張氏」を「鈞衡」⁵³とするが、いずれも誤りである。適園張鈞衡と苙圃張乃熊の父子を混同したとは思えないから、おそらく相続を考えたことに因る。しかし文祿堂が購入した時すでに適園張鈞衡(1871-1928)は死去しており、したがって当然、本書に張鈞衡の印はなく、張鈞衡『適園藏書志』(民国五年1916)にも著録されていない。文祿堂から購入したのは鈞衡の子、苙圃こと張乃熊である。『適園藏書志』に著録するものは後掲のI本=中央図書館蔵#09757。張乃熊はI本を含む蔵書を相続し、後にA本を入手した。

B 台湾・中央図書館蔵#09758：宋刊、存17巻、9冊⁵⁴

現存は「目録」残葉、巻8-13、巻23-25、巻29-30、巻35-39、巻42⁵⁵。「横

⁴⁹ 王文進(字は晋卿、号は夢莊居士)『文祿堂訪書記』(民国三一1942)巻4(p257)に「有「秀水朱氏潛采堂」「東郡楊紹和字彥合」「楊保彝」「東郡宋存書室」印。周暹『周叔弼批註楹書隅録』(国家図書館出版社2009年)「總目」の「宋本添注重校音辯柳先生文集四十五卷、外集二卷」(8A)の批註に「不精。王晉卿買去」、また周暹『周叔弼古書經眼録』(国家図書館出版社2009年)「古書經眼録」(p194)にも詳しく著録あり。丁延峰『海源閣藏書研究』(商務印書館2012年)に「楊紹和購于都門、鈐有楊紹和、楊保彝、楊承訓三代藏書印十六方。此書散出後、為嘉興藏書家張乃熊氏收藏」(p184)は誤り。王紹曾等『訂補海源閣書目五種(上)』(齊魯書社2002年)「補」に「散出後由文祿堂歸吳興張氏」(p234)がよい。なお、丁氏書の内容は多く王氏書に似る。

⁵⁰ 張乃熊『苙圃善本書目』(1941年)巻1「宋刊本」(台湾・広文書局「書目三編」1969年、p11)。孫伝鳳鈔本『海源閣藏書目』(王紹曾等『訂補海源閣書目五種(上)』所収、p654)に王文進(号夢莊)に批註(民国三年)があり、「添注重校音辯唐柳先生文集四十五卷外集二卷二十四冊四函」下に「夢記：嘉興刻大字本、内有鈔補、吳興張氏收去」という。

⁵¹ 王紹曾等『訂補海源閣書目五種(上)』に「當是一九三七年從江南藏書世家中購得、並未標明購自何家」(p235)、昌彼得『〔增訂〕蟬庵群書題識』に「中央圖書館藏有此刻凡三部、皆抗戰期中於滬上購得者」(p263)。

⁵² 『增訂中國訪書志』(p554上)。

⁵³ 王紹曾等『訂補海源閣書目五種(上)』に「『添注重校音辯唐柳先生文集』四十五卷『外集』二卷、均歸吳興張氏」の「張氏」に註して「鈞衡」とする(p628)。

⁵⁴ 『國家圖書館善本書志初稿』(p134)、阿部隆一『增訂中國訪書志』(p553下)。

⁵⁵ 昌彼得『〔增訂〕蟬庵群書題識』は「卷三十」(p265)を脱す。

經閣收藏圖籍印」「華亭朱氏」の印あり、明代の華亭（上海松江）の朱大韶（1517-1577）の旧蔵⁵⁶。他に「仁義里」⁵⁷、「舜城」⁵⁸の印あり。以後の収蔵者は不明であるが、民国二三年（1934）には北平の琉璃廠にあった老舗書房の文友堂が所有しており、傅增湘（1872-1949）はそれを経眼している⁵⁹。

殘帙。存「目」十八葉，卷八至十三，廿三至廿五，廿九，卅，卅五至卅九，四二，計十七卷。每卷皆有殘缺。……

藏印有「横經閣收藏圖籍印」、「仁義里」，皆朱文。甲戌（民国二三年1934）十二月十三見於文友堂。

さらに翌年には明・游居敬刊本や南宋・廖本と対校しており、「校宋刊大字本『重校添注音辯唐柳先生文集』跋」⁶⁰に次のようにいう。

前歲海源閣藏書輦致來津，其中宋刊九行本『唐柳先生文集』，余曾得一覽，審其版刻，當在諸本之前。然倉卒中不及校勘，深以為憾。頃游廠市，在文友書坊見一宋刊殘本，行款正與海源閣所藏同，存卷為卷八至十三，卷二十三至二十五，卷二十九，卷三十，卷三十五至三十九，卷四十二，通得十七卷。格式為九行十七字，白口，雙闌，版心上記字數，下記刻工姓名，標題為「重校添注音辯唐柳先生〔文〕集」，避諱為朗、匡、胤、恒、貞、桓、慎諸字，注文為「韓曰」「孫曰」「童曰」「張曰」「集注曰」「補注曰」各家，刻工為朱梓、曹冠宗、曹冠英、鄭錫、朱春、高春、高文、繆恭、陳良、王仔、王僖、毛端、石昌、丁松、王遇、陳斗南、張待用、王顯、龐知柔、董澄、吳敘、金滋、徐禧、劉昭、馬良、丁日新諸人。……

此書首卷僅存「目錄」後半，「序跋」已失，不詳為何時、何人所刻，海源閣本亦無之。然楊氏『楹書隅錄』引『何義門讀書記』言：……。今以此殘冊中所存諸注家姓氏及刊工姓名考之，則余謂此本與海源閣藏本同者，

⁵⁶ 嘉靖二六年（1547）進士、字は象玄、号は文石。『增訂中國訪書志』（p554下）は「朱韶」に誤る。

⁵⁷ 昌彼得『〔增訂〕蟬庵群書類識』は「仁義里」も「皆其（朱大韶）所鈐」（p265）とする。ただし「舜城」印の存在には言及なし。

⁵⁸ 朱承爵（1480-1527）か。「舜城漫士」「舜城居士」「舜城朱承爵」を称する。常州江陰県の舜城（今の長涇鎮・文林鎮）の人。号は左庵、存餘堂、行素齋、集瑞齋、字は子僊。明の画家にして蔵書家、刻書家でもあった。ただし「舜城」の印は知られていない。

⁵⁹ 傅增湘『藏書羣書經眼録』卷12「重校添注音辯唐柳先生文集四十五卷」（中華書局2009年、p893）。『藏書訂補邵亭知見傳本書目』卷12下「〔補〕重校添注音辯唐柳先生文集四十五卷」（中華書局2009年）で「二十二」（p1025）に作る「二」は「三」の誤字。

⁶⁰ 傅增湘『藏園羣書類記』卷12（上海古籍出版社1986年、p611-612）。

既無疑義。乙亥（民国二四年 1935）⁶¹ 六月……校畢記。

「海源閣藏本」とは先のA本を指す。それと同版である「校宋刊大字本『重校添註音辯唐柳先生文集』」は、収蔵印・存巻状況（数・第）から考えて中央図書館蔵#09758 = B本であること疑いない。「華亭朱氏」と「舜城」印の存在を記録していないのは見逃したためか。「横經閣收藏圖籍印」「仁義里」は各冊の首巻に二印上下して捺されているが、「華亭朱氏」は各冊の巻末に、「舜城」は巻38葉01Aのみにある。印は毎巻ではなく、冊ごとに捺されており、冊は明代の形を保存している。

冊	01	02	03	04	05	06	07	08	09								
卷	序	目	08	09	10	11	12	13	23	25	29	30	35	37	38	39	42
首・末	缺	缺						缺			缺						
横經…印			○		○		○		○				○		○		○
仁義里			○		○		○						○		○		○
華亭朱氏				○		○				○				○		○	○
舜城															○		

「存「目録」後半」は計「十八葉」、「目録は初の部分を欠き第五葉に始り、第三六葉までを存し、その間脱葉がある」⁶²、現存本も 01-04・09・10・11・13-18・29-34・37 を缺葉し、存 18 葉。存缺葉はほぼ I 本 = 中央図書館蔵#09757 補修本の状態と同じ。ただし I 本のような補配はない。民国二四年以後、文友堂から南方に渡り、中央図書館に帰したのは二六年以後であろう。

C 現収蔵者不明：存残葉、1冊⁶³

1997年に中国のオークションで残巻「宋版『重校添註音辯唐柳先生文集』」1冊が出品された。残巻B本の僚巻であろう。残念ながら今日その行方は不明であるが、ネット上に公開の写真2葉によれば、「線装本」で、表紙に次のような収蔵者自筆の書入れが見える。

宋板柳文 二十一頁

甲戌春二月文友堂魏笙甫挾

此來售以銀餅三十五枚易得之

⁶¹ 『[増訂] 蟬庵群書題識』は「民國二十五年此殘帙流入北平廠肆」（p265）というが、傅增湘の記録によれば「甲戌（民国二三年 1934）十二月」以前のこと。

⁶² 『國家圖書館善本書志初稿』（p134）、阿部隆一『増訂中國訪書志』（p553下）。

⁶³ 97春季中国藝術品拍賣會（上海朵雲軒拍賣有限公司、1997年6月）[0711：宋版《重校添註音辯唐柳先生文集》、「RMB：100,000-140,000」（<http://auction.artron.net/paimai-art17760011/>）。

蓮痕記 [蓮/痕] (朱文方印) [鹿城/陳氏] (朱文方印)

「陳氏」、「蓮痕」は号、原名は定揚、後に侃、字は燕方、室名は根香廬、清末民国の間、鹿城(江蘇省蘇州市下轄昆山市)の人、民国初期の著名な作家⁶⁴。出品情報によれば、「華亭朱氏(白)」の印があるという。B本中に見える多数の印の中の一つであり、多数ある朱大韶の印の中の一つでもある⁶⁵。この蔵書印や残存部分、さらに民国「甲戌」二三年「文友堂」、購入の時・所から判断して傅增湘が寓目する以前のB本=中央図書館蔵本#09758の僚巻ではなかろうか。出品は1冊21葉のみ。他の写真1葉は首葉、「夔州刺史劉禹錫纂」唐柳先生文集序(1A)であるが、この「序」中の註には「潘云」がある。この「序」は劉本を用いて補修したものであるのみならず、版式・字様・版面状況から見て後掲するI本=台湾・中央図書館蔵#09757補修本のそれと完全に同一の版である。陳蓮痕旧蔵21葉は残葉を1冊に輯綴したものであるが、おそらくその残葉は正集中のそれではなく、#09757の「目録」が計37葉であり、#09758「目録」の残葉が18葉であったことから考えて、劉「序」2葉と「目録」19葉(=37-18)ではなかろうか。#09757「目録」の首行に「重校添註音辯唐柳先生文集目録」とある。文友堂あるいは陳蓮痕が「宋版『重校添註音辯唐柳先生文集』」と鑑定したのもこれに拠るのではなかろうか。ただし#09758「目録」残18葉は宋版であるが、#09757「目録」中のそれと重複しない葉は劉「序」と同じくすべて補刻である。現物を見なければ何ともいえないが、少なくとも公開の「序」部分は陳蓮痕が鑑定する「宋版」ではない。ただし「蓮痕記」手筆の真贋も別の問題として残る。

D 広東省博物館蔵：宋刊、存3巻(巻20-22)⁶⁶、1冊⁶⁷

「横経閣收藏圖籍印」「仁義里」(ともに巻20-01A)、「亭朱氏」(末葉)⁶⁸の印あり。

⁶⁴ 『京華春夢録』『清宮四大奇案』『同治嫖院』『順治演義』『同治游春』『順治出家』『雍正奪嫡』『乾隆休妻』等々多い。

⁶⁵ 林申清『中國藏書家印鑑』(上海書店出版社1997年)には朱大韶の印鑑6種(p31)の印影を収める。

⁶⁶ 『中國古籍善本總目(肆)』(線裝書局2005年、p1205上)。『第四批國家珍貴圖書圖録』(國家圖書館出版社2010年)#03114(第2冊p248)、劉漢忠『柳宗元著作版本圖考』(広西人民出版社2012年、p23)に影印(巻20葉01A)あり、鄧小紅・張正霞『『重校添註音辯唐柳先生文集』研究』(『重慶三峽學院學報』2012-6)は他に2葉を附すが極めて不鮮明(p112)。

⁶⁷ 李艾玲「廣東省博物館蔵『重校添註音辯唐柳先生文集』簡析」(『文物鑒定與研究(二)』文物出版社2004年)に「是整套書中の第11冊、原來具體冊數不詳」(p99)という第11冊と判断した根拠は不明。

⁶⁸ 李艾玲「廣東省博物館蔵『重校添註音辯唐柳先生文集』簡析」(p99)に拠る。鄧小紅等『『重

蔵書印はB本＝中央図書館蔵#09758と同じで、存巻もB本の缺巻と合致するから、明・朱大韶旧蔵本の僚巻にちがいない。傅増湘が北平の文友堂で寓目したB本は巻14から巻22まで缺であったから、すでに民国二三年（1934）以前に分散していた。現在、裏貼りされた上⁶⁹、「線装」⁷⁰であるのは、胡蝶装が後に仕立てなおされたのである。

E 北京図書館蔵#5562：宋刊、存5巻（巻18-20、巻43-44）、4冊⁷¹

「晉府書畫之印」（巻20-01A）あり。初代の晋恭王・朱桐（1358-1398）あるいは子孫、朱鍾鉉（1428-1502）・朱知焯（1487-1533）の収蔵。その後の経緯は、「汪士鐘藏」（巻18-01A）印があり、汪士鐘（1786-?）の収蔵に帰している。清代の嘉慶・道光の間である。道光二年（1822）顧千里「序」の汪士鐘『藝芸書舍宋元本書目』『宋板書目』⁷²に二種の『柳集』を著録する。

柳子厚文集 四十五巻。

柳柳州集 存：三之八，十四之二十五，三十八之四十五，外二巻。

存巻状況からみて後者『柳柳州集』が鄭本であろう。当時は26巻（6+12+8）と『外集』2巻が存していたから、後に散逸して「十四之二十五」中の3巻（18-20）、「三十八之四十五」中の2巻（43-44）が残った。

一説に「瞿鏞藏本」⁷³とするが、その根拠を知らない。汪士鐘の蔵書は多くが清末近い咸豊年間に鉄琴銅劍樓瞿鏞（1794-1846）や海源閣楊以增（1787-1855）に帰したが⁷⁴、現存残巻本に瞿鏞の蔵書印らしきものは見えず、またその蔵書目録にも著録がない⁷⁵。ただ、葉德輝（1864-1927）『書林清話』巻3「宋私宅家塾刻書」の節に

校添註音辯唐柳先生文集』研究』には見えず。

⁶⁹ 李艾玲「廣東省博物館蔵『重校添註音辯唐柳先生文集』簡析」（p99）に「托裱以及重新裝訂過」（p99）。

⁷⁰ 鄧小紅等「『重校添註音辯唐柳先生文集』研究」（p105）。

⁷¹ 『北京圖書館古籍善本書目』（p2061）。

⁷² 中華書局「叢書集成」#0041（p18）。

⁷³ 丁延峰『海源閣藏書研究』（商務印書館2012年、p184）。

⁷⁴ 曹培根『瞿氏鐵琴銅劍樓研究』（蘇州大学出版社2008年、p67）、李雲『中國私家藏書（下一清前期及近現代）』（貴州人民出版社2009年）「汪士鐘與藝芸書舍」（p35）。

⁷⁵ 『鐵琴銅劍樓藏書目録』（咸豊七年1857序、『清人書目跋題叢刊（3）』『鐵琴銅劍樓藏書目録・楹書偶録・滂喜齋藏書記』中華書局1990年）、『鐵琴銅劍樓藏宋元本書目』（光緒二三年1897江標刻本、『宋元版書目題跋輯刊（2）』北京図書館出版社2003年）、『鐵琴銅劍樓宋金元本書影・附識語（三）』（台湾・廣文書局1970年）、瞿良士『鐵琴銅劍樓藏書題跋集録』（上海古籍出版社2005年）。

姑蘇鄭定。刻『重校添注柳文』四十五卷、『外集』二卷，見『瞿目』、『黃記』。

殘宋本『五百家〔注〕音辨唐柳先生文集』下云：“姑蘇鄭定刊於嘉興。”

という記載が見える⁷⁶。まず「姑蘇鄭定」、嘉興知府による刊行を「私宅家塾刻書」に分類するのが誤りであるが、「見『瞿目』」も正確ではない。『瞿目』とは同書巻1等にいう「瞿鏞有『鐵琴銅劍樓書目』：二十四卷、光緒三十四年鏞孫啟甲刻本」を指し、「見『瞿目』」とはこれに著録されている、つまり「瞿鏞藏本」であったことを謂うように読めるが、次の黃丕烈（1763-1825）の題跋との混同がありはしないか。『黃記』とは同書巻1等にいう「黃丕烈有『士禮居藏書題跋記』：六卷、光緒十年潘祖蔭刻本」を指し、その『士禮居藏書題跋記』巻5に「五百家注音辨唐柳先生文集十一卷：殘宋本」とあるから「姑蘇鄭定。刻『重校添注柳文』」ではない。注記にいう「云：姑蘇鄭定刊於嘉興」とは黃丕烈がいう「殘宋本『五百家〔注〕音辨唐柳先生文集』」の「下云」を指すのではあるが、『五百家注音』本に関連して言及しているに過ぎない。具体的には黃丕烈旧蔵の『五百家注音辨唐柳先生文集』殘卷本の扉にある題識に次のように見える⁷⁷。

余向聞『柳文』以吳門鄭氏本為最善，東城（長洲）五聖閣顧氏有殘本。數年前，書賈曾以示余索重直，且未審其為鄭本與否，故未之得，時往來于心不能釋。自遷居縣橋（嘉慶八年），去顧所居不遠，跡之，書主人已作古，無從問津矣。今茲五柳主人以此二冊贈余，欣喜之至。蓋即前所見物也。書存十六至二十一，三十七至四十一，卷第之原不可知，因檢近刻『直齋書錄解題』，見有“『重校添注柳文』四十五卷、外集二卷：姑蘇鄭定刊於嘉興，……其所附益也”云云。案諸是本，庶幾近之，然亦有不同者：每卷題「五百家注音辨唐柳先生文集」或加「新刊」於其首，不云「重校添注」也。……未知直齋所解題者即此否也。……戊辰（嘉慶十三年1808）冬至前一日燒燭書此跋。

後に鉄琴銅劍樓瞿鏞に帰したのが本書である。瞿鏞『鐵琴銅劍樓藏書目錄』巻19に「五百家注音辨唐柳先生文集十一卷：宋刊殘本」⁷⁸に

宋魏仲舉編。原書四十五卷，今存第十六卷至二十一，第三十七卷至四十一

⁷⁶ 岳麓書社1999年、p70。

⁷⁷ 中華再造善本（國家圖書館出版社影印、2003年）。また、『堯圃藏書題識』巻7「『五百家注音辨唐柳先生文集』十一卷：殘宋本」、『黃丕烈藏書題跋集』（上海古籍出版社2013年）所収（p390）。

⁷⁸ 『鐵琴銅劍樓藏書目錄』（咸豐七年）。『鐵琴銅劍樓藏宋元本書目』（光緒二三年）もほぼ同じ。

卷。中有「舊注」……“貞”、“徵”、“恒”字皆有減筆。楮印甚精。舊為吳中文氏藏書。每卷首有「文伯仁德承章」、「梅花谿李氏重父家藏」二朱記。といい、また先の黄丕烈題識は蒐集されて『鐵琴銅劍樓宋金元本書影』⁷⁹や孫の瞿啓甲（1873-1940）『鐵琴銅劍樓藏書題跋集録』⁸⁰に収められている。明らかに『五百家注』本＝魏本を指しており、鄭本ではない。しかし葉德輝は他所では「見汪『目』」といい、また『藝芸書舍宋元本書目』の書名を題字しているから⁸¹、汪士鐘が鄭本の収蔵していたことを知らないはずはない。「見『汪目』」とすれば済むことをなぜ「見『瞿目』、『黄記』」という不正確な記載をしたのか不可解である。すでに「私宅家塾刻書」に入れるのが誤りであり、また「見『瞿目』、『黄記』」とは「『黄記』」の「殘宋本『五百家〔注〕音辯唐柳先生文集』下云」を指しており、しかも『黄記』には著録されているのではなく、言及が見えるに過ぎない。

その後の経緯は不明。嘉慶間には26巻が存在していたが清末民国初、おそくとも抗日戦争を経た100年後には、散逸してわずかにその1/5ほどが残存した。現存本には「黄裳珍藏善本」「黄裳鑑藏」「艸二亭藏」「黄裳容氏珍藏圖籍」「黄裳藏本」「黄裳」「黄裳珍藏圖書印記」等の印があり、これらは現代作家にして収蔵家でもあった容鼎昌、筆名は黄裳（1919-2012）、草草亭の旧蔵であったことを告げる⁸²。北京図書館所蔵殘卷本は存5巻であるが、押印は巻18から巻20にあり、さらに巻20の末（20B）には

三十八年（1949）春獲此殘本柳集於姑蘇舊肆。全年初夏五月十六日夜（夜）雨窓題記。〔黄裳〕（印）

と自署されている。「姑蘇舊肆」というから蘇州の古書店に渡っていた。店名は不明であるが、汪士鐘も蘇州長洲の人であるから、この殘卷本は蘇州に伝存していた一部である。

巻43・巻44には印はなく、缺葉が多い。巻18は葉01から葉03（03B末は殘存）、巻43は29葉以後、巻44は葉8から葉16まで、葉27以後は缺。巻18-01Aは補綴されていて黄裳の印があるが、わずかに原刻本の右下部分が残存しており、

⁷⁹ 『鐵琴銅劍樓宋金元本書影・附識語（三）』集部12。

⁸⁰ 『鐵琴銅劍樓藏書題跋集録』巻4（上海古籍出版社2003年、p228）。

⁸¹ 「蘇州嘉魚坊西文學山房發行」本の封面裏。

⁸² 黄裳『前塵夢影新録』（齊魯書社1989年）、『來燕榭讀書記（上下）』（遼寧教育出版社2001年）、『來燕榭書跋（增訂本）』（中華書局2011年）、『古籍稿鈔本經眼録—來燕榭書跋題記録』（中華書局2013年）には見えない。

そこに「汪士鐘藏」の印がある。補修されたのはその間、おそらく民国初期である。また、現存本は4冊であり、巻18・19と巻20、さらに巻43と巻44に分冊されているが、「管府書畫之印」は巻20-01Aにあり、巻19-01A等にはないから、早くは巻19以前と巻20以後とに分冊されていたであろう。

F 南京博物院藏：宋刊、存2巻（巻37、巻41）⁸³

未見。傅增湘は先のA・B二本を寓目した後、また別の一部を発見している。『藏書羣書經眼録』に著録する鄭本二部はA・B二本であるが、後に『邵亭知見傳本書目』を訂補した際に『柳集』に鄭本を補足して次のようにいう⁸⁴。

海源閣楊氏藏一全帙。（以上はA本）又見一殘帙，……鈐明朱氏橫閣藏印。

（以上はB本）又見數殘冊，均內閣大庫物，其卷三十七、四十一兩卷，余為檢出，藏之午門歷史博物館，有元代補葉。（以上はF本）

南京博物館藏殘本は巻数とその第次の一致から傅增湘が検出した零本であると考えられる。内閣大庫にあった残冊の中に鄭本残巻37・41が存在し、故宮の午門に移設（1918年）された国立歴史博物館（中央博物院北平分院）に移管された。その後、日中戦争時期に文物は南方へ疎開し、さらに中国の内戦によって精品が台湾に運ばれるが、本残巻本は南京の中央博物院（1950年に南京博物院）に留まった。僅か2巻の零本であったために厳選から漏れたものか。

管見によれば、鄭本は各地に分散して収蔵されているが、B本とC本・D本は本来同一部の零本であり、E本とF本の関係はE本の旧蔵者であった汪士鐘の記録には巻37が見えないから清代嘉慶以前に分散していたこととF本の巻37・巻41が同時に内閣大庫に存在したのに矛盾する。

南京博物院藏本には如何なる収蔵印があるのか、調査を俟って再考しなければならない。

G 日本・東京大学東洋文化研究所藏：宋刊、存1巻（巻9）⁸⁵

巻9、1冊のみ、計31葉。葉01A・10B・11Aは缺、いずれも半葉であるのは原刻本が胡蝶装であったことに起因するであろう。蔵書印は「東方文化學院東京研究所圖書之印」・「東洋文化研究所圖書」の二種のみ。前者は補葉01Aのみに、後者は毎葉にあるがBAに跨っているから、すでに線装本に仕立て直

⁸³ 『中國古籍善本總目（肆）』（線装書局2005年、p1205上）。

⁸⁴ 『藏園訂補邵亭知見傳本書目』巻12下「〔補〕重校添註音辯唐柳先生文集四十五巻」（p1025）。

⁸⁵ 東洋文化研究所「貴重：206402439894」。『域外漢籍珍本文庫』（西南師範大学出版社2011年）第1輯集部第1冊（p287-302）、劉漢忠『柳宗元著作版本圖考』（p25-39）に全葉を影印。ただし前者には東洋文化研究所等の収蔵印なし、後者は01Aを脱す。

されていた。缺葉である 01A に本来は旧蔵者の印が捺されていたのではなからうか。本書は日本収蔵であるが、早期に、つまり鎌倉あるいは江戸時代に舶来したものではなく、民国初期まで中国に、恐らく清朝内閣大庫にあった零本である。昭和三年(1928)、長澤規矩也(1902-1980)が北平を訪問した際、琉璃廠の書肆高氏から零本 2 卷 2 冊を購入し、内 1 卷 1 冊を自蔵とし、他の 1 卷 1 冊を東方文化学院(1929 年創設)院長の服部宇之吉(1867-1939)に渡し⁸⁶、後に東洋文化研究所に移管された。次の H 本が長澤氏自蔵の僚巻である⁸⁷。

H 日本・関西大学図書館：元明初通修、存 1 卷(巻 10)⁸⁸

巻 10 の 1 冊のみの零本。葉 21 以下 6 葉は缺。長澤規矩也(号は静齋)の蔵書を蒐集した関西大学図書館長澤文庫に収蔵。同館編「目録」によれば「元明初通修本」「包背装」、蔵書印「静齋藏書」。「元明初通修本」は正確ではなく、「目録」注記にいう「『阿部隆一遺稿集』第 1 卷(汲古書院 1993 年刊)」⁸⁹に拠るものであって、すでに長澤氏自身は「南宋刊本」⁹⁰「南宋末年浙刊本」⁹¹と見做していた。長澤氏が北京で購入した鄭本零本 2 卷中の 1 卷、G 本の僚巻である。同文庫収蔵本は「包背装」ではなく、G 本と同じく線装本に仕立て直されているが、原刻本は胡蝶装であった。G 本・H 本は共に他に蔵書印がないようであるが、後に傅增湘が民国二三年(1934)に文友堂で寓目している B 本は巻 9・巻 10 を有するから朱大韶旧蔵本 = B C D 本とは明らかに別本であり⁹²、長澤氏が

⁸⁶ 長澤規矩也『東京大学東洋文化研究所蔵雙紅堂文庫分類目録』(昭和三六年 1961)に「この年、出發前當時の東方文化學院院長服部〔宇之吉〕博士から、宋版などの標本の代購を頼まれたため、その中で二冊を購入、一冊〔竹嶼山房雜部〕を北京で見つけた禮記正義・重校添註音辯唐柳先生文集等の零本とともに文求堂を通じて納め、一冊を博士に獻じた。全部購ひ去るには忍びなかつたためである。同様な例は北京でもあつた」(『長澤規矩也著作集』巻 6「わが蒐書の歴史の一斑」、汲古書院 1984 年、p175)、また「收書遍歴」(『大安』12-2、1966 年)に「北平では、例の高姓が、内閣大庫本かもしれない、三朝本の八行本禮記正義と南宋刊本重校添註音辯唐柳先生文集の零本二冊を持つてきたので、各一本を東方文化學院に納め、各一本を手もとにおいた」(『長澤規矩也著作集』巻 6、p261)。

⁸⁷ ともに巖紹暹『日藏漢籍善本書録』(中華書局 2007 年)には未収録。

⁸⁸ 「関西大学図書館長澤文庫貴重書目録」(資料 ID : 205452582)。

⁸⁹ 『阿部隆一遺稿集』第 1 卷(汲古書院 1993 年)で鄭本に言及するものは「宋元版篇」であり、おそらくその「元・明初通修：中央、適志、昌識」(p168 上)に拠るが、同頁の「存巻九：東文」と同じく宋版と考えるべきである。

⁹⁰ 「收書遍歴」(『長澤規矩也著作集』巻 6、p261)。

⁹¹ 「宋刊本刻工名表」(『長澤規矩也著作集』巻 3、p187)。

⁹² 長澤規矩也「收書遍歴」(『大安』12-3、1966 年)に「路南の翰文齋韓氏は大店で、商賣はほとんど番頭にまかせきり、中で姓高という者、もつともすばしこく、古版本を引き出すこともうまく、客の好みをつかむ心理もすぐれていたが、一〇〇元の金を私したというの

「内閣大庫本かもしれない」と推察する出所によれば、傅增湘が「又見數殘冊，均内閣大庫物」というF本と同出の殘冊ではなからうか。

I 台湾・中央図書館蔵#09757：

元明通修、四五卷、外集二卷、4函32冊⁹³

蔵書印によって遡及すれば、「巡撫宣府關防」「葉氏臧書」、明の蘇州昆山の葉盛（1420-1474）⁹⁴、「葉德榮甫世藏」、その後裔葉國華（1586-1671）⁹⁵に繼承⁹⁶。「白堤錢聽默經眼」、清代に入って湖州の書肆である萃古齋の錢時霽（1750-1802）⁹⁷が鑑識している。「范錡借觀」「華笑廬藏」「白舫」、湖州烏程の范錡（1764-1845）⁹⁸に渡り、その後、繆荃孫（1844-1911）が代筆した『適園藏書志』（民国五年1916）に著録されているから民国初以前に、あるいは叔父張宝善（張靜江の父）と分家した光緒二十九年（1903）以後に⁹⁹、「烏程張氏適園臧書印」張鈞衡（1871-1928）に渡った。この間の経緯は不明。張鈞衡が民国十七年に死去すると、「苙圃收藏」「苙白」「張乃熊」、長子張乃熊（1890-1945）に相続され、先のA本と同じく民国二六年（1937）以後に中央図書館に帰した¹⁰⁰。

烏程張氏はA本とI本の二部を収蔵していた。張乃熊『苙圃善本書目』（民国三〇年1941）巻1「宋刊本」に次のように著録する¹⁰¹。

重校添注音辯唐柳先生文集四十五卷：唐柳宗元撰。宋刊九行十七字本。三十二

で店を追われて小さいながらも獨立した。……まもなく衰えた。……文友堂魏氏は堂々たる構えで、傅增湘などの著名蔵書家との間に來往がしげかつたので、われわれ新參者は全く相手にされず、そのため、われわれははいりにくかつた」（『長澤規矩也著作集』p264）。

⁹³ 『國家圖書館善本書志初稿』（p135）、『增訂中國訪書志』（p554下）。

⁹⁴ 字は與中、号は蛻庵、諡は文莊、かつて巡撫宣府となる。『增訂中國訪書志』（p554下）が「葉文恭」とするのは『適園藏書志』巻10「増廣注釋音辨柳集四十五卷：宋刊本」の「葉文恭舊物」（國家圖書館出版社「清末民國古籍書目題跋七種」2009年、p350）に拠ったものである。「恭」は「莊」の誤。

⁹⁵ 字は德榮。葉盛の七世孫。葉盛『菴竹堂書目』（叢書集成本0033）に葉國華「葉氏書目後跋」（天啓三年1623）あり。

⁹⁶ 葉盛『菴竹堂書目』（成化七年（1471）自序）巻3に「柳子集〔厚〕文集二十冊」とあるのがこれか。ただし隆慶三年（1569）に五世孫の葉恭煥が友人に貸出した時に作られた偽本とするのが通説。張雷「『菴竹堂書目』的真本和偽本」（『江蘇圖書館學報』1998年第3期）。

⁹⁷ 浙江湖州の人、字は景凱（一に景開）、号は聽默。乾隆年間に書肆「萃古齋」を白堤（杭州）に開設。黃丕烈と交流あり。

⁹⁸ 浙江烏程の人、字は声山、号は白舫、室号は華笑廬。

⁹⁹ 張南琛、宋路霞『張靜江、張石銘家族：一個傳奇家族的歷史紀實』（重慶出版社2006年）。

¹⁰⁰ 昌彼得『〔增訂〕蟬庵群書題識』（台湾・商務印書館1997年）に「其（張乃熊）藏書於抗戰期中，悉售歸中央圖書館」（p265）。

¹⁰¹ 張乃熊『苙圃善本書目』（1941年）巻1（台湾・広文書局「書目三編」1969年、p11）。「影印『苙圃善本書目』序」「緑絲欄外有「榮寶齋藏版」五字，是出坊買傳鈔。為孝感昌瑞先生所藏」。

冊。「外集」二卷。

又四十五卷：宋嘉興鄭定刊本。二十〔四〕冊(?)¹⁰²。「目錄」鈔配。海源閣舊藏。上(32冊本)がI本、下(24冊本)が「海源閣」楊紹和旧蔵のA本。I本は父の適園張鈞衡(字は石銘)がすでに収蔵していたものであり、繆荃孫(1844-1911)が代筆した『適園藏書志』(民国五年1916)巻10に次のようにいう¹⁰³。

『増廣注釋音辨柳集』四十五卷：宋刊本。原題“宋童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義”。宗說……。乾道陸之淵序，但題“柳文音義”，後人合宗說之注釋、敦頤之音辨、緯之音義，合為此編，別題曰“増廣注釋音辨”。書内又曰「重校添注音辨」，大約宋坊賈為之。每半葉……。

陳氏『書錄解題』云：……。疑即鄭定所刊。又校語中稱大字本者數條，證之此本，無不吻合，是即何義門所據校，『直齋』所著錄者也。宋槧岳倦翁……，正在寧宗朝也。斧季(毛扆)謂『柳集』傳世絕尠，故義門(何焯)以得見殘帙為幸。此本通體完整，彌足珍已，惜闕『外集』二卷，内又歷代補板，亦有黑口者。收藏有「葉氏藏書」朱文方印，有「巡撫宣府關防」官印，葉文恭[莊](葉盛)故物也。

複数の書題をもつ奇妙な一部であるが、現存本#09757でも首巻に陸「柳文音義序」と「増廣注釋音辨唐柳先生集諸賢姓氏」があり、また「増廣注釋音辨」本による修補が確認される。この著録中で「原題」から「別題曰“増廣注釋音辨”」までは四庫全書『増廣注釋音辨柳集』四十三巻の「提要」とほぼ同じであり¹⁰⁴、それに依拠して同一本と理解したために、『増廣注釋音辨柳集』と誤審したのである。しかし総目には「重校添註音辯唐柳先生文集目錄」と題されており、以後の各巻でも首題に「重校添註音辯唐柳先生文集」とあり、その書題は『外集』末葉まで続くから、本体は明らかに鄭本であり、後に張乃熊『苕園善本書目』は「重校添註音辯唐柳先生文集」に改めている。

I本が蔵書印「葉氏藏書」「巡撫宣府關防」との一致から中央図書館蔵#09757本であることは疑いない。しかし『適園藏書志』が「闕『外集』二巻」というのは現存#09757本が『外集』二巻を有するのに合わない。『苕園善本

¹⁰² 広文書局影印本に「(?)」の書き込みあり。冊数を疑うものであり、現存本と照合させれば「四」を脱字している。

¹⁰³ 張鈞衡・繆荃孫『適園藏書志』巻10「増廣注釋音辨柳集四十五巻：宋刊本」(國家図書館出版社「清末民國古籍書目題跋七種」2009年、p349)。

¹⁰⁴ 「舊本題“宋童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義”。宗說……。據乾道三年吳郡陸之淵序，稱……。之淵序但題“柳文音義”，……蓋宗說之注釋、敦頤之音辨、緯之音義，本各自為書，……別題曰“増廣注釋音辨唐柳先生集”也。」

書目』の記載にも『外集』については書題には見えず、小字注記の末に「『外集』二巻」と加えられている。このような記載も『蓮圃善本書目』の他の条とは合わない。たとえば次に「李賀詩歌編四巻、集外詩一巻：北宋刊公牘紙印本、九行十八九字、二冊」とあるように、まず正集と外集を記すのが書式となっている。またI本だけではない。張乃熊の著録はA I 両本ともに書題ではただ「四十五巻」とするが、現存本では両本とも『外集』2巻を有する。「海源閣舊藏」のA本はすでに楊紹和『楹書隅録』・『宋存書室宋元秘本書目』¹⁰⁵に、また子の楊保彝『海源閣宋元秘本書目』¹⁰⁶にも、「宋刊添註重校音辯唐柳先生文集四十五巻四十五巻、外集二巻、二十四冊、四函」と明記されており、さらにそれを寓目した王文進や周叔毅も『外集』二巻の存在を記録していた。『適園藏書志』の後半は『楹書隅録』の著録と酷似しており、四庫全書「提要」と『楹書隅録』を貼り合わせて作文したことによって一部を誤ったのではなからうか。『楹書隅録』も引用によって構成されており、繆荃孫の記載はそれを直接利用している。今、後半部分の対照表を作って示す。

何焯『義門讀書記』	楊紹和『楹書隅録』	張鈞衡『適園藏書志』
<p>康熙丙戌新秋，假外弟吳子誠所收宋槧大字本『柳先生文集』，粗校一過，緣失「序文」、「目錄」，不知出于何人。其字畫乃乾、淳以前書也。此本合「非國語」上下二卷，共編為四十五卷，而「外集」二卷附焉，疑祖四明本。「箏郭師墓誌」註中已載胥山沈氏，則非沈誨本矣。雖闕十之二，然近代所祖刊本，皆莫及也。</p> <p>毛斧季云：“宋本李、杜、韓、柳集，李、柳兩家最少。”予亦幸而偶見之耳。</p> <p>香案小吏何焯記。</p> <p>陳氏『書錄』曰：……。</p> <p>此本疑即鄭定所刊云。</p> <p>焯又記。跋明刻小字板。</p>	<p>案『何義門讀書記』云：“康熙丙戌，假吳子誠所收宋槧大字本『柳集』，緣失「序文」、「目錄」，不知出於誰氏。</p> <p>合「非國語」二卷，共四十五卷，「外集」二卷附焉。</p> <p>雖闕十之二，然近代所祖刊本，皆莫及也。”</p> <p>又云：“陳氏『書錄』曰：……。</p> <p>疑即鄭定所刊。”</p>	<p>陳氏『書錄解題』云：……。</p> <p>疑即鄭定所刊。</p>

¹⁰⁵ 王紹曾等『訂補海源閣書目五種（上）』所収（p611）。

¹⁰⁶ 王紹曾等『訂補海源閣書目五種（上）』所収（p717）。

いう¹⁰⁷。

康熙丙戌（四五年1706）新秋，假外弟吳子誠所收宋槧大字本『柳先生文集』，粗校一過，緣失「序文」、「目錄」，不知于何人。……此本合「非國語」上下二卷，共編為四十五卷，而「外集」二卷附焉，……雖闕十之二，然近代所祖刊本，皆莫及也。……香案小吏何焯記。

陳氏『書錄』曰：“……。”此本疑即鄭定所刊云。焯又記。跋明刻小字板。

癸巳（五二年1713）八月，借義門師明刻小字本柳集。校過下注一刻云云，即此本所異同也。其本無「龍城錄」并無「集傳」等篇。……惟「詩」得先生所藏宋刻殘本校過，是刻即翻此本，而注中某曰某曰都削去。幾使文理不順矣。

右附石湖張進跋。

吳子誠所藏「宋槧大字本」「宋刻殘本」が鄭本であり、「明刻小字板」「明刻小字本柳集」は劉本の系統である。前掲の現存鄭本中、南京博物院蔵F本の存2巻は未見であって詳らかにしないが、それ以外の現存本には吳子誠の蔵書印らしきものは見当たらない。ただし子誠は字の可能性もあり、名・号は未詳。手掛かりとなるのはその特徴をいう「失「序文」、「目錄」と「闕十之二」である。すでに「序」「目」を失っており、A本・I本・BC本は「序」「目」を有するが、いずれも後人による補配である。詳しくは後述。存巻からいえば、「闕十之二」に近いものはA本・I本である。現存本は45巻および「外集」2巻を備えているが、補配葉が多く、I本は「目錄」「序」を除く正集・外集中の補葉が約200葉、全体の2割弱（18%）、A本が93葉、全体の1割弱（8.2%）。I本は「闕十之二」に近い。今日知られる現存本との関係から考えれば、I本が何焯所用の校本、外弟吳子誠旧蔵本ではなかったかとも推測されるのであるが、I本には明・葉盛等の蔵書印「葉氏臧書」「葉德榮甫世藏」が陸「序」（1A）にあるから、すでに明代初期から『増廣注釋音辨柳集』を用いて補配されていたようである。いっぽうE本＝北京図書館蔵#5562存5巻は、旧蔵者の汪士鐘は何焯と同じく蘇州長洲の人であり、また現存残巻こそ少ないが、汪の記録によれば「序」「目」を抜き、嘉慶・道光の間に26巻と『外集』2巻が存していたから、何焯が見た清初の頃は缺巻はさらに少なかったであろうと考えれば、E本との関係は排除できない¹⁰⁸。

¹⁰⁷ 何焯『義門讀書記』卷37「河東集下」末（中華書局1987年、p676）。

¹⁰⁸ 高平「論何焯の柳宗元研究」（『中國韻文學刊』（湘潭大学）24-04、2010年）に「可惜鄭定

周叔弢旧蔵本

周暹（1891-1984）、字は叔弢は、先述したように、民国一六年（1927）に海源閣蔵書が天津で売りに出された際、鄭本を寓目し、仔細に記録しているが¹⁰⁹、後に自ら1巻を入手している。周暹手稿本『宋刻工姓名録』の「宋本刻工姓氏」に次のように見える¹¹⁰。

柳文 卷第四十三 寧宗時 九行十七字 自蔵
重校添註音辯唐柳先生文集 刻本 框字缺筆

王遇 曹冠宗 高文 高春 金滋 吳鉉 吳椿 龐知德 繆恭

書眉上には「海源閣、張適園、皆有全書」という書き込みがある。周暹『古籍經眼録』では鄭本の刻工35名を挙げるが、それは海源閣蔵書に拠ったものであり、ここに挙げるのが9名であるのは「自蔵」がただ巻43のみであったことによる¹¹¹。周暹の蔵書は北京図書館や南開大學・天津市図書館等に寄贈されており¹¹²、E本=北京図書館蔵#5562存5巻4冊（巻18・19、20、43、44）の内、前2冊（巻18-20）が黄裳旧蔵であり、巻43は1冊を成しているが、巻43に周暹の蔵書印はなく、また黄氏と周氏の寄贈本が一書として扱われることもなからう。

吳子誠旧蔵本・周暹旧蔵本の行方と現存本との関係については今後の課題である。

Ⅲ 現存本と原刻本との関係

以上の現存鄭本の中で足本と言えるものはA・Iの二本である。ただしいずれも補修されている。以下、主にこの二本（マイクロフィルム）に拠って南宋鄭本の特徴について述べる。

現存本の補修と原刻本の特徴

鄭本南宋原刻の版式は次の通り。正集の首行に「重校添註音辯唐柳先生文集卷第幾」、版匡は高20.5-21cm×寛15-16cm、半葉9行17字、いわゆる大字本

本在何焯之後散失嚴重，現僅存五卷，藏于北京國家圖書館」（p21註①）というのは何焯所拠本を指すようにも読めるが、その根拠を知らない。あるいは国内に現存する鄭本そのものを謂うものか。

¹⁰⁹『周叔弢批註楹書隅録』（国家図書館出版社2009年）、『古書經眼録』（『周叔弢古書經眼録』国家図書館出版社2009年p194）。

¹¹⁰『周叔弢古書經眼録』p452。

¹¹¹『自莊嚴堪書目』『歷年收書目録』（『周叔弢古書經眼録』所収）には見えない。

¹¹²蘇精『近代蔵書三十家（増訂本）』（中華書局2009年）「周叔弢自莊嚴龕」（p185）。

に属す。小字夾註双行、左右双辺、上下単辺、版心は白口、上方に大小字数、単魚尾、「柳文卷幾」¹¹³、葉「幾」、最下方に刻工姓名を刻す。以上は先行の論文等にほぼ著録する所である。

鄭本は全約 1,170 葉から成る。具体的には正集 45 巻が 1,092 葉 (36、26、28、17、26、12、11、23、31、26、18、28、23、68、24、27、14、25、19、29、14、17、16、17、26、25、13、13、14、25、20、15、19、24、11、18、35、28、24、30、19、54、50、29、25)、外集 2 巻が 37 葉 (12、25)、計 1,129 葉、さらに正・別の「目録」が 39 葉 (37、2)、これに加えて巻首には少なくとも「劉序」2 葉が冠せられていたはずである。

A 本は楊氏旧蔵本であるが、それを購入した王文進の記録によれば¹¹⁴、購入時の状態で

劉禹錫「序」。宋諱避至“慎”字。補鈔「目録」及卷中八十餘葉。であった。現存の A・I 両本とも巻首には「劉序」を冠す。「劉序」つまり『柳集』を編次して序を寄せた劉禹錫の作が『柳集』に冠せられていたことは疑いないが、現存本はいずれも補配である。A 本「序」は「貞」「微」等、宋諱を缺筆するが、影鈔であり、無註本に拠る鈔補の如く推測されるが、諸本間の異文によって劉本に拠るものと判断される。ちなみに魏本 (四庫本・兪本ともに) の「焉」・「訕」を劉本は「然」・「詘」に作る。「貞」「微」に缺筆があるから宋本・覆宋刊本を用いたのであろう。1A には朱彝尊「秀水朱氏潛采堂圖書」、楊紹和「東郡宋存書室珍藏」、楊保彝「海源殘閣」等、多くの蔵書印が捺されているが、「常郡楊伯鎮家藏」はなく、朱彝尊 (1629-1709) が最も早いから、それ以前の補配である。I 本は陸之淵「柳文音義序」を冠するが、これも劉本に冠せられていた。1A の印では「葉氏臧書」が最も早い。「劉序」は陸「序」の後に置かれており、「潘曰」潘緯註が引かれており、また劉本との対校によっても、劉本に拠る補配であることは明白である。南宋『直齋』が「姑蘇鄭定刊於嘉興，以諸家所注輯為一編」というのによれば、それを告げるような内容、おそらく鄭定の「序」が附されていたであろう。ただし南宋官刻本の例からいえば「後序」であった可能性が高い。

A 本の「目録」(正集 39 葉、別集 2 葉)は首尾具備して缺葉なく、原刻本の如く見えるが、じつは『國家圖書館善本書志初稿』が「文集目録全爲鈔補」と指

¹¹³ 『増訂中國訪書志』(p553 下)に「柳文卷第幾」とするのは誤。「第」字は無し。

¹¹⁴ 王文進『文祿堂訪書記』巻 4 (上海古籍出版社 2007 年、p257)。

摘するように、「劉序」と同じく、全て影鈔による補配である。『書志初稿』にはA本鈔写の拠る所について言及がないが、檢視するに、劉本によるものではなく、ただ正集中の標題をそのまま書き移して「目録」に仕立てたに過ぎない。影鈔の書者は版心下方に行書体で書かれており、『書志初稿』によれば「劉文、蕭(?)至[周玉?]¹¹⁵、丁大、于之、王貴、若永、吳外、唐大、裴謙、柳文、陳君、曹文、梁丘、柳□、韓□、趙天、□莊、龔大、蘇石、許文、星一、李申、劉永、白永、呂文、宗蘭(?)、葉長、竇仁、賈更(?)、石門、凌大東、江東、田新一、史言(?)、唐良」等、ほぼ一人一葉の担当である。劉文・周玉は「劉序」、他は「目録」。いっぽうI本の「目録」は19葉が鄭本の残葉であり¹¹⁶、A本よりも原形を留める点で貴重である。他は劉本・魏本等で補配。詳しくは後述。なお、B本=中央図書館蔵#09758存17巻本の「目録」存18葉も末葉(37)を缺くのみで、全てI本の19葉に重なる。

正集は「非國語」2巻を含む45巻、『外集』は上下2巻。『外集』は沈晦の拾遺であるから鄭本も沈本の系統にあり、しかも韓醇の註が多く引用されているから韓醇詁訓本(以下、韓本と呼ぶ)が更に拾遺した新編外集一卷を収めていてよいが、すでに『直齋』がただ「『重校添註柳文』四十五巻、『外集』二巻」というのに拠れば、南宋本おそらく原刻本には新編外集がなかったのではないか。後の明清の著録も新編外集の存在をいうものはない。

編次と所収にも特徴がある。現存する沈晦四五巻本系統では韓・眉・魏・劉・廖等の諸刊本が知られているが、その中で鄭本は眉本・魏本に近く、魏本に最も近い。魏本との関係について詳しくは後述。ここでは構成の観点から所収と編次の特徴について触れておく。

1) 「畧民詩」の有無

南宋本『柳集』の特徴の一つは先ず巻1に現れる。韓・眉・魏・劉等の沈本系統は「畧民詩」を収めるが、現存鄭本ではA本はこれを収めず、I本は収める。A・I両本は巻1の末(葉35以下)を缺葉、ともに「貞符」の途中(葉34)で切れており、A本は「貞符」を補修して巻終し、末行(35A)に「重校添註音辯唐柳先生文集卷第一」とあるが、I本はさらに「畧民詩」を加えて末行(36B)「重校添註音辯唐柳先生文集卷第一」で巻終する。A本が「貞符」で

¹¹⁵ 『増訂中國訪書志』、『周叔弢古書經眼録』は「周玉」に判読する。ただし「劉序」の01Bのみ。01Aは劉文。正集には見えない。

¹¹⁶ 具体的には葉5・6・7・8・11・12・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・35・36・37。

終わるのは永州三三巻本が「眎民詩」を正集ではなく、「外集」に収めるのに近い。しかし鄭本は沈晦四五巻本の系統にあるから「眎民詩」を収めていたのではなかろうか。A本の「貞符」鈔補葉は最も劉本に近い。韓・眉・魏の各本では「貞符」「眎民詩」の順に、劉本のみが逆に「貞符」「眎民詩」の順になっており、劉本は「一本在「貞符」後」と註する。A本が「貞符」で終わるのは巻1首に「唐雅、唐詩、貞符并序」とあるのに近い。A・I両本ともに「目録」を缺葉し、A本は正集中の表題に拠って編成したのであるから整合はする。注目すべきはI本の補修であり、「眎民詩」は劉本・魏本とも異なっており、その中には「重校」「添註」が見られ、版心中の葉次(35、36)も合致する。したがってI本は鄭本で補綴したと考えねばならない。ただし原刻の鄭本つまり「貞符」葉34より版匡はやや小さく、黒口(大小字数、刻工名ともに無し)、双魚尾で、字様も明らかに異なる。詳しくは後述するように、I本にはこのような黒口の版による補配が多い。A本の巻1末は沈晦四五巻本系統と同じく「眎民詩」を収めるI本に従うべきである。A本は「貞符」の末葉のみを缺いたのでなく、それ以後を缺いたために、その後に「眎民詩」が継続していたことを知らず、「貞符」で巻終してしまったのである。

なお、本来巻1は「貞符」で終わっており、後人によって編入されたものに違いない。趙希弁『讀書附志』(淳祐九年1249)¹¹⁷に

「柳先生文集」四十五卷、『外集』二卷、『附録』二卷。……若夫昌黎所作先生「墓志」「祭文」、他本皆在『附録』中、惟此本在「正〔貞〕符」之後、蓋(劉)禹錫自謂附於第一通之末也。

とある。『外集』を収める四五巻本であるから、むろん劉禹錫編三〇巻本ではないが、沈晦四五巻本が「貞符」で終わっていたならば、「眎民詩」はその後、南宋初期に、韓註が見えるから韓本(淳熙四年1179)成立の間に、附益されたものである。「〔貞符〕之後」とは別に、宋刊本の鈔本である四庫底本には「眎民詩」の後に「柳子厚墓誌銘」と「祭柳子厚文」を収め、「墓誌銘」の題下註に

劉夢得序公之集云：“子厚名氏與仕與年暨行己之大方，有退之之「誌」若「祭文」在，今附于第一通之末。”今悉依公所編次，用附于見于此¹¹⁸。

という。後人が、おそらく韓本によって『新刊』を刊刻した成都の書坊が、加

¹¹⁷ 孫猛『郡齋讀書志校證』(上海古籍出版社2011年、p1171)。

¹¹⁸ マイクロフィルによれば「附」下には「于」らしき字があるが、文義不通。清人による鈔本には誤字衍字があるのではなかろうか。

えたものである¹¹⁹。

2) 「河間傳」の有無

また顕著な特徴は「河間傳」の有無に現れる。魏本では『外集』上巻に収めるが、鄭本は足本A・Iともにこれを収めない。ただし底本と考えられる魏本は、現存宋刻本残巻（巻16-21、巻37-41）はこの部分を抜き、また兪氏覆刻本は『外集』を覆刻していないために不明であるが、四庫全書本（巻首、巻1-21、外集、附録等）¹²⁰はこれを収める。四庫本は清初・天祿琳琅旧蔵本の宋刊本残巻に拠る。韓本には巻首行に「外集巻上：賦文誌八首」とあるが、今、9首を収めるから、沈本に「河間傳」は無かったのではないか。今日、「河間傳」を柳宗元の作と考える者が多いが、その確証はなく、永州本も『外集』に入れる。鄭本が意をもってこれを削除したとは考え難く、またそのことを告げるような註記もない。これを収める四庫全書本の底本である魏本の他に収めない魏本があったことも想像される。魏本でも四庫全書本が伝える宋刊本残巻と兪良甫覆刻本に若干異同が認められ、新海博士は「五百家註本の異種」¹²¹の存在を想定されている。魏本間の関係について改めて考えてみる必要がある。

3) 「箏郭師墓誌」の有無

何焯は「箏郭師墓誌」註中已載胥山沈氏、則非沈晦本矣」といい、鄭本の特徴として挙げているようであるが、まったくの誤りである。たしかに鄭本では「擊」下に註して「胥山沈公謂當作“擊”」として引かれているが、この条はすでに魏本が引き、しかも共に「韓曰：“擊”舊作“緊”」下に引くものであって、現に同文の註は韓本に見える。したがって鄭本のみの特徴でない。そもそもこの註文は沈晦「四明新本『柳文』後序」に

用私意補其闕，如……，“緊”當作“擊”，……，凡漫乙是正二千處而贏。と、校勘を例示するのに拠って加えられたものである。沈晦が「擊」に校正しているために韓註は「胥山沈公謂」を引いて「舊作“緊”」を告げているのである。つまり「載胥山沈氏」は、正に沈晦改定本を底本としていることを示す

¹¹⁹ 拙稿「韓醇『詒訓唐柳先生文集』南宋刊本初攷」（『孫昌武教授八十華誕紀念文集』百花文苑出版社2016年）。

¹²⁰ 『欽定天祿琳琅書目』巻3「宋版集部」（『天祿琳琅書目・天祿琳琅書目後編』上海古籍出版社2007年、p72）、「提要」に「内府藏本」「復得與『昌黎集注』（『新刊五百註音辯昌黎先生文集』先後同歸秘府）。

¹²¹ 「鄭定輯註本『重校添註音辯唐柳先生文集』札記」（新海一『柳文研究序説』汲古書店1987年、p275、p277）。

根拠の一つでこそあれ、「非沈誨本」を証するものではない。

鄭本と魏本との関係

『重校添註音辯唐柳先生文集』は「音辯唐柳先生文集」に「重校添註」を加えたものであり、「音辯唐柳先生文集」は魏本を底本としている。以下その根拠について述べる。

1：鄭本は正集45巻・外集2巻。全巻の大小字数は、「外集補遺」一卷、『外集』の「河間傳」や鄭本独自の「重校」「添註」を除いて、現存本に拠って試算すれば、缺葉が多いために正確な所は把握できないが、恐らく45万字はあり、その中で99.9%以上が魏本と同じであると推定される。

2：「添註」「重校」は魏本等にはない新註であり、「補註」は魏本に見える註であって鄭本ではほとんど踏襲されているが、若干混同が見られる。巻1-17A・巻2-02B・巻3-01B・巻3-07A(2条)・巻16-12B・18A・巻17-13A・巻18-04A・巻20-26A等々では「補註」を「添註」に作る。また、巻1-30Aの「重校」は魏本では「補註」である。巻2-12Aの「財註」は明らかに魏本「補註」の誤字。いずれも補葉ではない。補葉中ではこのような誤りは夥しい。これらの混同は逆に魏本と鄭本との密接な関係を告げている。

3：鄭本は、魏本と同じく「韓曰」「孫曰」「張曰」「童曰」「補註」等として註文を引用する書式、これを“記姓註”と呼んでおけば、この形式を踏襲する。後出の廖本はこれらを一律に削除する。今、継承関係が認められる眉・魏・鄭三間の記姓註の関係を表にして示す。鄭本の補葉は除いた。

№	鄭本	魏本	眉本	№	鄭本	魏本	眉本	
01	01-06A	童	黄	16	38-20B	徐	孫	
02	01-06A	孫曰	××	17	39-11B	孫	韓	
03	05-25B	董	童	18	39-15A	韓	孫	
04	15-12B	張	孫[張]	張	19	39-17A	徐	孫
05	15-14B	童	孫	張	20	40-04B	章	韓
06	16-25A	張	韓	21	40-09B	章	韓	
07	20-25B	童	章[童]	童	22	40-17A	孫	韓
08	27-05B	趙	孫	23	41-04B	董	童	
09	27-06A	唐	韓	24	42-24A	詩	孫	
10	30-21B	董	孫	25	42-42B	李	童	
11	31-10A	董	童	26	42-43B	韓	孫	
12	34-04A	章	韓	27	43-01B	張	孫[?]	張
13	34-04A	章	韓	28	43-12B	霍	韓	
14	34-20A	章	韓	29	43-18A	韓	孫[?]	韓
15	38-18A	徐	孫	30	45-24A	孫	韓	

約 6,000 条中、三本間のいずれかに相違がある場合は、鄭本と魏本が一致する例〔鄭=魏〕≠眉〕が多い。興味深いのは混乱と遺漏の一致である。12 等の「韋曰」は鄭・魏が一致するが、眉本では「韓曰」に作っており、かつ韓醇詁訓本にも見えるから、「韓」に作るのが正しい。「韋」氏なる註家は魏本(四庫本)の「柳集所收評論詁訓諸儒名氏」、眉本の「新刊百家音辯詁訓柳文諸儒名氏」にも見えない。魏本に始まる「韓」の略字あるいは誤字である。魏本は眉本に拠りながら相異なる所もあるが、このような同一から考えて、鄭本は韓本・眉本を直接参用したのではなく、また魏本によって諸家註を孫引きしているというよりも、魏本そのものを底本として使用していると考えてよい。従来の説の中には鄭本は「眉本と魏本を基礎とする」という見方もあるが¹²²、用いたのは魏本であり、端的に言えば、鄭本は魏本を底本として他本によって魏本にないものを追加した、「重校」「添註」本である。

ただし若干の齟齬も見られる。転記の際に生じるのは免れ得ない。〔鄭≠(魏=眉)〕や〔鄭≠魏≠眉〕の例は単なる鄭本の失誤と考えられる。24「詩」は直前の「絃吾詩」に、28「霍」は「曰」の下の「霍去病」に惹かれた例であろう。問題は〔(鄭=眉)≠魏〕の例である。03は現存する魏本中で兪氏覆刻本のみが「孫」に、四庫本は「張」に作る。宋刊残巻は缺。また、07は兪氏覆刻本のみが「章」に作り、宋刊残巻・四庫本は「童」に作る。鄭本は後者に一致する。単に鄭本が「章」を「童」の誤字と考えて改めたと考えられないこともないが、『直齋』には「曰章，曰孫，曰韓，曰張，曰董氏」とあった。黄丕烈が「董」を「童」の誤字とするのは 3・11・23 がそうであるが、「董」が「童」の誤ならば「章」も「童」の誤とは考えにくい。そもそも鄭・魏・眉の諸本中に「章」の例はこれを除いて見えないから誤字と思われるが、『直齋』の「章」も今本『直齋』の誤ではなからうか。「董」と「童」は形近の誤であり、「章」は「張」との音近の誤であろう。さらに 26・28 などは四庫本・宋刊残巻がその巻を缺くから魏本間における齟齬の有無を確認できない。あるいは鄭本のみ失誤の可能性もある。さらに廖本「凡例」の前文に

惟建安所刊五百家註本二集始具，然所引蔡夢弼、任淵、孫汝聽、劉崧、韓

¹²² 呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』(黄山書社 2004 年)に「鄭定在“百家注本”和“五百家注本”的基礎上經過重校添註而成」(p13)、高平「論何焯的柳宗元研究」(『中國韻文學刊』24-04、2010 年)に「……鄭定本。該本在“百家注本”、“五百家注本”基礎重校、添註」(p21 右)。

醇、童宗説、張敦頤、陳鶚諸家註文、間多龐雜、而胥山沈晦辯、雲間潘緯音義却未附見。

と、註家八人を列挙するが、「陳鶚曰」「陳曰」の註は魏本にも鄭本にも見えない。ただ魏本の「諸儒名氏」の末にはこの八名が同じ順で列記されているから、実際に本文を閲して代表的な註家を挙げたのではなく、単に「諸儒名氏」によって転記したに過ぎないであろう。

4：正文についても若干の齟齬が見られる。卷42-44A「柳州峒岷」、鄭本以外はいずれも「岷」を「氓」に作る。文意上「岷」は明らかな誤字。卷30「與楊京兆憑書」の12B「出十數篇書」、魏・眉は「十數」を「數十」に作る。数十は多過ぎるように思われるが、韓本・劉本も「數十」に作る。卷42-40B「青水驛叢竹天水趙云余手種一十二莖」、鄭本は魏本と同じであるが、眉本と韓本は「清水……」に作る。卷42-48B「酬家雞之贈」、鄭本は魏本と同じであるが、眉本は「酬柳柳州家雞之贈」に作り、眉本は「韓漳州書報徹上人亡因寄二絶」・「田家三首」・「行路難三首」・「感遇二首」等で「其二」「其三」と呼ぶ形式をとるが、魏本・鄭本はこれをとらない。これらの異同も鄭本と魏本との緊密な関係を示す。いっぽう卷15「晉問」13B「文公之霸」、鄭本は眉本および魏本の中で四庫本と同じであるが、兪本は「文公霸」に作る。兪本のみの単純な失誤なのか。

魏本と兪良甫覆刻本

かつて新海博士は「五百家註本の異種」の存在を想定された。元末、福建の刻工兪良甫等は日本に亡命し、慶元元年（1387）に京都嵯峨で魏本を覆刻したが¹²³、この覆刻本は版式のみならず、和刻本であって、さらに明初にあっても宋諱を缺筆するように、宋刊本の忠実な覆刻であるとはいえ、その所拠本には現存宋刊本と異なる部分がかかなりある。鄭本の卷41「祭弟宗直文」12Bおよび魏本中の宋刊殘卷本が「古人」に作るのを魏本の兪本のみが「故人」に作り、卷36「禮部賀冊太上皇后表」を兪本が「禮部……皇后賀表」に作る例などは単純な失誤と考えられるとしても、ざっと縦覧しただけでも表のような多くの相違がみられる。

¹²³ 拙文「日本舊校鈔『增廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷本及南宋刻『音註唐柳先生集』略攷」（『文史』2014-1、p251）。

№	巻葉	鄭本註文	眉	魏	鄭	廖	劉	
01	01-18A	〔孝恭斬之(△無此), 傳首京師。〕	○	○	×	○	△	
02	01-21B	又一本作“群臣”。	×	×	○	○	×	
03	02-20A	□□一本“出”作“無”、又一本無“無”(△“出”)字。	×	×	○	△	×	
04	03-05A	“矣”一作“已”。	×	×	○	○	／	
05	03-23B	□□一本“仁”下又有一“仁”字、“若以為智”四字。 〔『英華』〕	×	×	○	○	／	
06	03-26B	〔者, 故從而辨之。〕	○	○	×	○	／	
07	05-17B	□□“孝”一作“曹”。〔『全唐文』〕	×	×	○	○	／	
08	07-01A	□□“證”一作“澄”。	×	×	○	○	／	
09	07-01B	□□“素”一作“索”。	×	×	○	○	／	
10	07-01B	□□“字”一作“識”。	×	×	○	○	／	
11	07-01B	“達”(衍字), 一本“一其”作“統一”。	×	×	○	○	／	
12	09-26B	連□〔連州〕之人(鄭、兪均空一格、四庫魏本作“連州”)	×	▲	×	×	／	
13	10-20A	韓曰:“叱[吒]”〔怒也, 陟駕切。 (眉等缺“韓曰”, 劉無“怒也)〕	△	△	○	△	△	
14	11-02B	公〔謂〕射進士策不中。	×	×	○	×	／	
15	13-21A	(擘)(眉、魏作畢、劉、廖作畢) □□〔當作畢〕	○	○	×	×	×	
16	15-13B	文公之霸也。(兪無“之”)	○	▲	○	○	○	
17	18-07A	〔張曰:“睨”斜視也, 五計切。〕	○	○	×	×	／	
18	19-19A	〔東坡云:子讀柳子厚「三戒」而愛之, 乃作「河豚魚」「烏賊魚」二說「并序」以自警。〕(兪有, 宋、四無)	×	▲	×	×	○	
19	24-01A	〔“偶”一作“稱”。〕(劉作“稱”一作“稱”)	×	○	×	○	○	
20	24-01A	〔序謂自淮陽從調抵于京師, 罷選而歸, 當在貞元十七八年在京時作。〕	×	×	×	○	×	
21	32-01B	孫曰:□“也”一作“是”。	×	×	○	○	／	
22	36-12B	〔「井」下〕〔孫曰〕	○	○	×	／	／	
23	38-18B	〔增注云:穆宗時, 非宗元所作。〕	×	▲	×	×	○	
24	39-15A	補注云:二月二日。 〔眉、魏、廖作“一本(劉本)云:二十二日”〕	×	×	○	×	／	
25	40-01A	〔韓曰〕據「碑碣」, 〔公〕即憑壻〔婿〕也。 (眉、魏無「據碑碣」)	▲	▲	○	×	／	
26	42-54B	孫曰:柳惲詩“汀州採白蘋”。	×	×	○	○	○	
№	巻葉	〔 〕 = 鄭本無此字	○ = 有; × = 無					

これらは特徴を窺うサンプルであって、その全てではない。

1) 03・05・07・08・09・10の空格2字は恐らく「重校」が入るべき白釘であり、02・04・11は鄭本に見えて廖本に踏襲されているから確かに鄭本に存在したのであるが、その内容から考えれば、「重校」とすべき2字を缺いた例である。

2) 21・26は「重校」「添註」とすべきを「孫曰」に誤った例かも知れない。

3) 01・06・17・19・22等是不注意にして漏らした例。

4) 12は清四庫館臣が空格を小字夾註と判断して「連州」2字を填めたもの。

5) 16は兪本のみ脱字と見做すこともできよう。

以上は単純な失誤として説明することもできようが、18と23のような例は不可解である。

6) 23の「増注」等11字は「代裴行立謝移鎮表」の題下に在り、魏本の中で宋刊残本(存巻16-21、巻37-41)に見えず、兪本のみ存在する。しかも魏本を底本とする鄭本にも、また魏本が底本とする眉本も、さらに鄭本を底本とする廖本にも見えない。また、魏本「諸儒名氏」にも、末に「新添集註五十家；續添補註七十家」が見えるが、「増注」家は見えない。ただ奇妙なことに、現存本では沈本系統にあっても眉>魏>鄭>廖と継承される系統とは異なる劉本において「増注云」以下の8字が見える。劉本には宋刊45巻本と元明刊43巻本の二種があるが、この註文は変わらない。劉本によって「増注」されたかのようである。

7) 18の巻19「永某氏之鼠」の末尾に、魏本では兪本のみ「東坡云」等計28字がある。宋本残巻・四庫本にはなく、また眉・鄭・廖にもない。じつはこれも劉本に見える。22と同じく兪本のみに見えるから「増注」といえるが、「増注云」の3字のない点が異なる。

これらは兪氏が覆刻の際にさかしらをして劉本に拠って勝手に増補した註とは考えにくい。増補を図る以前の問題として、一介の刻工職人としてそのような編集能力を有していなかったのではなからうか。

これらは註文・正文に見える相違であるが、兪刻本には別に増補した所があった。

8) 島田翰(1879-1915)『古文舊書考』¹²⁴はつとに兪刻本について次のように著録している。

……「目録」首載「序傳碑記紀」,「目録」次附刻『誠齋集』第九十五一卷,卷端題“新刊五百家注音辯唐柳先生文集卷第一”。……

案:「目録」次所附刻『誠齋集』第九十五一卷,即楊萬里廷秀『天問天對解』也。……今所通行兪刻『柳文』多闕茲一卷,其存者極鮮,亦可以為寶矣。蓋楊氏之注在釋『天問天對』難讀,故良甫入梓時附刻之於『柳集』,使後人易看讀而已。

兪刻本には南宋・楊萬里『誠齋集』巻95所収の『天問天對解』1巻が「目

¹²⁴『古文舊書考』(民友社、明治三十六年1903)巻3「新刊五百家注音辯唐柳先生文集四十五巻」(上海古籍出版社2014年、p262)。

録」の後に増補されていた。貴重な記録である。これが兪氏の附刻であれば「天對」の解釈が『誠齋集』に在ったことを知っていたことになる。『天問天對解』の単行本は明代に入ってからであるらしいが¹²⁵、兪氏の附刻1巻はそれよりも早い。島田が附刻を兪良甫に由ると判断する根拠は明らかでないが、兪氏ではなく、所拠本がそうであったことも考えられよう。新海博士はつとに魏本残卷（四庫全書本）との校覈を通して覆刻本の拠った「原刻はたぶん魏仲舉の刻本より少々新しいと思われる」¹²⁶と示唆されている。兪氏覆刻本所拠の魏本が、現存宋刊本とは同一ではなく、増註附刻されている可能性は排除できない。ただし『天問天對解』は劉本には見えない。宋本・元重刻本、さらに兪刻本以後の明重刻本にも附刻しているものはないようである。断定するには附刻本を得て綿密な照校作業する必要があるが、今、少なくとも顕著な2例がいずれも劉本と合致するから劉本に拠る補註であるならば、兪氏覆刻本所拠の魏本は劉本以後、早くても劉欽「後序」が書かれた淳祐九年（1249）以後の刻ということになる。魏本（慶元六年1200）から半世紀あるいはそれ以上後のことである。

以上によって鄭本が魏本を底本としていること、疑いない。両本の差異は0.01%強の極低レベルに止まるであろうが、その微少の差異は現存する魏本そのものの成立に関して再考すべき重大な問題を投げかけている。稿を改めて考えなければならない。

鄭定が魏本を底本とした理由はひとえにその充実にある。まず、魏本は三〇巻本を吸収した四五巻本系統に属し、また「外集」2巻を有する沈晦本に属する。さらに魏本は、先行の眉本「百家註」に対抗して「五百家註」を書名に標榜したように、5倍ではないが¹²⁷、当時最も充実した輯註本であった。魏本の底本も眉本系統であり、顕著な相異点は、魏本が「蔡曰」蔡夢弼の註を、特に巻14「天對」に採用し、嚴有翼の『柳文切正[證]』（紹興三二年）に拠って「嚴曰」

¹²⁵ 姜亮夫『楚辭書目五種』（1960年、上海古籍出版社）「天問天對解一卷」に「至明始有單行本」として崇禎十年刊本を挙げる（p38）。『四庫全書總目』卷148「楚辭類存目」に「已載入『誠齋集』中、此其別行本也。訓詁頗為淺易」という。四部叢刊本『誠齋集』卷95に収める。

¹²⁶ 『鄭定輯註本『重校添註音辯唐柳先生文集』札記』p278。

¹²⁷ 眉本「新刊百家音辯詁柳柳文諸儒名氏」には101名の姓氏と「新添集註一家、續添補註一家」の計103名を挙げるが、魏本「柳集所收評論詁訓諸儒名氏」は同101名と「新添集註五十家、續添補註七十家」の計221名とする。また、魏本「韓集所收評論詁訓音釋諸儒名氏」では148名を挙げた上でさらに「新添集註五十家、新添補註五十家、新添廣註五十家、新添釋事二十家、新添補音二十家、新添協音十家、新添正誤二十家、新添考異十家、新添皆逸姓氏：總計五百餘家」とするが、合計しても370名に過ぎない。

を加えるなど、眉本の輯註を増益しただけでなく、また眉本の「詳註」を「集註」に改めた点などにある。これらを除外すれば正文・註文ともに基本的に一致する。これを要するに、魏本は蜀中の輯註本の上に閩中の諸註を加えて充実を図り、鄭本はその魏本にさらに校勘と註釈を加えて充実させ、廖本は当時最も校・註ともに充実していた鄭本に拠った。

(2017.1.19)

* 本稿は平成 28 年（2016）科学研究費補助金（課題番号 26370409）による研究成果の一部である。